



日本よ、今、闘論！倒論！討論！2025第911回
BRICS・グローバルサウスの未来、そして日本は
R7/5/30

パネリスト：

アリベイ・マムマドフ（作家・日露関係 Youtuber “アリベイチャンネル”）
宇山卓栄（著作家）※リモート出演
大井幸子（国際金融アナリスト・武蔵野大学客員教授・株式会社 SAIL CEO）
川島博之（ビングループ主席経済顧問・元東京大学大学院准教授）
藤和彦（経済産業研究所コンサルティング・フェロー）
ポリーナ・ギンズブルグ（人文科学博士）

司会：水島総

水島「皆さん、今晚は」
一同「(礼)」

水島「闘論！倒論！討論！2025第911回目の討論となります。今日は『BRICS、そしてグローバルサウスの未来、そして我が日本は』ということですが、関わり方は殆ど感じられないんですよね。ずっと西ヨーロッパの方に未だくっついていていただけというようなことですが、そういう面はあるんだろうかっていうことでございます。今日は、そういう意味で、今、トランプ政権のやっていること、或いは、プーチン政権が進めていること、ウクライナの問題も含めて、ただ、実は、そこが中心じゃなくなっている。所謂、BRICSとかグローバルサウスっていうのが、もしかしたら、そっちの方も動いているんじゃないかということも言われるようになりました。

そういう意味で皆さんの議論もお聞きしたいと思う訳であります。早速、出席の皆さんをご紹介します。まず、ビンググループ主席経済顧問、ビンググループというのはベトナムの経済グループですね。はい。その経済顧問、元東京大学大学院の准教授の川島博之さんです。宜しくお願いします」

川島「はい。宜しくお願い致します」

水島「国際金融アナリスト、武蔵野大学客員教授、株式会社SAIL、CEO、大井幸子さんです。宜しくお願いします」

大井「宜しくお願いします」

水島「経済産業研究所コンサルティング・フェロー、藤和彦さんです。宜しくお願いします」

藤「あ、宜しくお願いします」

水島「人文科学博士、ポリーナ・ギンズブルグさんです。宜しくお願いします」

ポリーナ「はい。お願いします」

水島「作家で日露関係 YouTuber “アリベイチャンネル” のアリベイ・マムマドフさんです」

アリベイ「宜しくお願いします」

水島「失礼しました、舌が回っていないで（苦笑）」

一同「（笑）」

アリベイ「言い辛いですね（笑）」

一同「（笑）」

水島「ごめんなさいね。だからアリベイさんと呼ばせて貰います」

アリベイ「はい、アリベイで宜しく」

水島「はい。続きまして、今日は北海道に出張なさっていて、北海道にあるチャンネル桜北海道のスタジオから作家の宇山卓栄さんです。宜しくお願いします」

宇山「宜しくお願い致します」

水島「はい。背景に映っているのは、北海道のいい風景ですけどね、今、丁度、いい季節になりました、宇山さん、天候の方はどうか判らないけど、北海道は、これから一番、いい季節ですね」

宇山「そうですね。ただ、今、札幌はかなり暑くてシャツ1枚でも汗ばむぐらいですよ」

水島「なるほどね」

宇山「はい」

藤「そう10度ぐらい東京よりも高いですから」

水島「（笑）そういう意味では、中々、昔は梅雨のない北海道とか結構、言われて、全然、違う風になって来たねえ。結局、気候変動が凄いなだね。大体、日本が亜熱帯になりつつあるっていう噂もありますから。はい。ということで、今日は、このメンバーでお送り致します。宜しくお願いします」

一同「（礼）」

水島「では、今言ったように、実際は色々、BRICSやグローバルサウスということが言われていますけども、でも割とメディアも何も実態としてと言うか、現実として、この台頭や膨張とか拡大というものを、あまり捉えてないんじゃないかと。未だ常にアメリカやヨーロッパとか中国とかね。その見方も、これまでもあっていいんですけども、違う見方をしなきゃいけない時代が来ているんじゃないかというようなことで、このBRICSやグローバルサウス、こういった皆さんの評価ですね。過大評価も過小評価も、それ以上でも、それ以下でもない評価が出来ればと思っているので、まず、この意味での、皆さん

の見解をお聞きしたいと思います。

勿論、ウクライナや今のイスラエルのガザ地区の虐殺とか色々な所で動いています。今日、中国と漁業協定のね、福島のを輸入するとかいう話が、やっとなったと。中国が今迄、我々の国のE E Zに浮かべていたブイを、実際、私は漁船で行って破壊しようと思っていますよ」

一同「(笑)」

水島「色んなところで探してみたんですけど、場所が特定できない」

藤「ああ、そうですか、はあ～」

水島「そう。石垣島から北東88キロで…」

藤「まあ、それは分からないですねえ」

水島「中間線の何キロとかね」

藤「そりゃあ、判らないでしょうね」

水島「だから石垣空港へ行くと、公安の方が私を迎えに出るということですけども」

藤「(笑)」

水島「じゃあ、まず、川島さんからお願いします」

川島「私は現在、ベトナムの会社の顧問をしております。ベトナムのハノイと東京を行ったり来たりしているという状況です。ハノイから見たグローバルサウスということについて、少しお話ししたいと思います。ハノイから見ていると、色んな情報、例えばマニラの情報とかバンコクの情報、この辺が入って来るんですね。ですから東南アジアという視点で、このグローバルサウスというのを考えてみようと思っています。

日本から一番近いグローバルサウスは、東南アジアだと思います。東南アジアは現在、全部合せると7億人程度の人口が居て未だ増えていますから、これから8億人くらいには直ぐになっちゃうということで、中国が13億人くらいなんでしょうね、大分、サバを読んでいるから。そうすると中国の6割くらいの人口を持っているところですね」

水島「そうですね」

川島「もっと西の方に行くと、バングラディシュとインドが16億人近く、バングラディシュが1億数千万人、インドが14億人ぐらい持っていますから、それを抱えて逆にグローバルサウスと言って日本が考えた時に、一番手近な地域だと思います。

それでミャンマーとバングラディシュ、インドの間にアラカン山脈とかいうのがあるんですけど、インパール作戦かなんかが行われましたけれど、私は、ずっと東京大学で開発経済学部、長くやっていた時に、アラカン山脈を越えると、やはり日本人の感覚と凄く違う人達が出て来るんですよ」

水島「ああ、そうか、なるほどね」

川島「ビルマ迄は私達が行って、例えば『ビルマの豎琴』というような映画がありましたけど、感情が近いんですね。泣けるところが同じという感じですが、インドへ行っちゃうと、泣けるところがちょっと違うんですね」

一同「(笑)」

川島「いつもヒンズー教みたいな世界が出て来てしまうと、私達がついていけない。ガネーシャが出て来て、どうのこうのって言われてもピンと来ないというような感じがあるんですが、そういう意味ではグローバルサウスの問題が出て来た時に、私達はアフリカのことも、やはり東南アジアのことを、もっとよく知り、次の国家戦略の中で、やはり東南アジアの7億人と、どう付き合っていくかというのは非常に重要な課題だと思います。実は常々言っていますが、一番、日本人にとって付き合い易いところだと思います」

水島「まあ、そうですね。うん」

川島「豊臣秀吉の時代から、何か少し国力に余裕があると朝鮮半島に行って、民国を支配するとか、そういう発想になる訳ですけど、どうも付き合っ上手くいったことは無いと。白村江の戦いから上手くいったことが無いと。私は常々思うんですが、自分の近くに居る人と仲良くするって凄く難しいんですね。よく見えてしまうし、利害が近いので足を踏んだじゃないかと、いや、お前の肩が触れたんだろうと、直ぐそれが始まってしまうので、別にこれは日本が朝鮮半島を支配したからとか日本人が性格が悪いからではなくて、世界的に大体、隣とは仲悪いんですね。

歴史的に虐められたとか、いや、お前が先に殴ったんだっていうのを言っている訳で、ですから、私は現在、経団連なんかは中国と、もっと仲良くしようっていう、方向を言っているんですが、まあ、喧嘩をするのは、いけないと思いますけど、中国、それから朝鮮半島とは喧嘩をしない程度にお付き合いしていけばいい訳で、より深い関係、それから経済関係をつくっていくというのは、必ず何処かで、また歴史認識を見直せだとかが始まっちゃうんですね」

水島「はい、そうですね」

川島「日本は、私の本にも、よく書いているんですが、実はベトナムというのは北部仏印進駐、南部仏印進駐っていうのがあって、あの戦争のきっかけを作ったところですね。それでベトナムは9月2日に独立をしています」

水島「うん」

川島「1945年9月2日です。私達は8月15日が戦争に負けた日ですが、法律上、戦争に負けたのは9月2日ですね。降伏文上、ミズリー号の、その日にホー・チ・ミンさんが独立宣言をしたということで、9月2日が独立記念日になっています。ベトナムは北部仏印進駐とか南部仏印進駐、それから一時、日本がフランスと共同統治した訳ですが、1945年に日本が単独で支配していた時代がある訳ですね」

一同「うん」

川島「そのことは、実はベトナムの教科書には書かれています。ちゃんと日本帝国主義の侵略を受けたと。それに対してベトナムの人民、ベト民ですね、ホー・チ・ミン以下が、果敢に抵抗し、独立を勝ち取ったというようなストーリーになっているんですが、このストーリーをきちっと話せるベトナム人は、よっぽどのインテリだと思います。

私達が歴史の教科書で色々なことを習っても、それを、きちっと覚えているのは予備校の先生とか、そういう人達だけで（笑）、普通の人には、いや、私は大学入試で世界史をとっていなかったからとか言って殆ど知らないのと同じで、日本がベトナムを占領したということについて正しい認識を持っているベトナム人というのは、極々一部のインテリです。

インテリは比較的、社会に力を持っている人が多いので、日本人として、きちっとした知識を持っていないで中途半端なことを言うと嫌われると。まあ、嫌われるって馬鹿にされることが起こるんですが、普通の感じで日本に対して大変、悪い感情を持っているっていうことはありません。

それから、ベトナムに居ると、フィリピンの情報も入って来るんですが、フィリピンもルソン決戦、レイテ決戦等をして大変、戦争の時にフィリピンの人を巻き込んだ戦争をしてしまったので反日感情が強い所だという風に言われますが、あれから80年経ったので、もう孫の時代、ひよっとしたらひ孫の時代になっちゃって来ている訳で、ベトナムとフィリピンを見ている限り、反日感情というのが殆ど無いと」

水島「うん」

川島「むしろ日本というのは、中国に対抗してくれるアジアの勢力だということで、両方共、非常に親日的ですね」

水島「うん。そうですね」

川島「日本は過去80年は悪い事をしていないし、経済的にも優れていると。ただベトナムで聞くと、現在の日本人は30年前の日本人に比べて元気がないと」

一同「(笑)」

川島「トヨタ、ホンダが頑張ってタイに工場を造っていた昭和の末期から平成初期と比べると、現在の日本人というのは、皆さん、老成されてしまって、だから淡々と業務をこなすだけと。それに対してベトナムで見ていると、韓国が非常に強い勢いで東南アジアでの進出を強めていると。

それに比べて日本は、何というか、おとなしいというような印象を受けています。ただ、その韓国がベトナムに居ると非常に評判がいいのかと言えば、非常に評判は悪いんですね(笑)。何故なら、やっぱり約束を守らないとか、これは別に中国のことを強いて悪く言うのではないですけど、やはり現在の日本人っていうのは約束を守ることについては、かなり道徳的で、言ったことは守るとか、払うと言ったお金は払うという感じがあるんですが、中華文明という風に言っては語弊があるのかもしれませんが、向こうで聞く中国、特に韓国だと都合のいい時は都合がいいんですが、潰れてしまうと金を払わないで直ぐに逃げちゃうとかいう噂が凄くあるので、韓国に対する評判というのは、あまり良くありません。そういう意味では、グローバルサウスという問題が出て来た時に、私は、東南アジアというのは、日本のパートナーとして非常にいいと。それなりに遠いし、それなりに近いし、それから先程、アラカン山脈の話をしました、感情的にも非常に近い。ベトナムだと大乘仏教が入っていて、中国の影響で儒教も入っていますから、私みたいな年長者を結構、敬ってくれるんですね」

一同「(笑)」

川島「先生、先生って言って。この感情があるし、それからミャンマーやタイに行っても、あそこは上座部仏教ですけど、やはり仏教徒の共通の感情は、上座部と大乘というのは違いがあるんですが、かなり近い所があって、生き物に対する感覚とかいうことがあって仲良くなれると。

ですからグローバルサウス戦略を考える時には、私は今、たまたまベトナムの会社に勤めているということがあります、まず東南アジアというのを念頭におくのが、日本としてはいいのだろうと。

それからベトナムでも今、少子高齢化が凄く進み始めていますし、それからタイでも進んでいます。タイはベトナム以上に進んでいるので、そういう意味では人口がどんどん爆発していった日本に大量に人が来て乗っ取られてしまったりとか、そういう心配は無いですね。実は、今、ベトナムから大量に日本へ働きに来っていますが、それで何か色々な所々で泥棒なんかして問題を起こしていますが、やはりベトナムも少子化が進んでいるので、この問題がずっと続くとは思えないですね」

一同「うん」

川島「お付き合いをされていて時系列的に、どんどん変なことが起きていく、インドとかアフリカと付き合っていると変なことが起きるかもしれないですね。そういう意味では、そのような危険性も無いし、極めて日本としては安全に付き合える国だと思っています。最後に長くなるので一つだけ申し上げたいんですが、中国に近い部分ですね。フィリピン、ベトナム、タイ、ミャンマーの辺りですね。この辺りは非常に中国に対して、警戒感があります。これは歴史的認識ですね。やっぱり約2千年っていうか千年ぐらいに渡って、中国から色々な意味で仕掛けられて来た。それから過去200年、まあ、この100年は、華僑という人達が沢山、来ていて、華僑に対する東南アジアの人々の印象は極め

て良くありません。経済的に牛耳られていると」

一同「うん」

川島「華僑について言わせれば、華僑って計算が出来るんですね。何処が違うのと、私は思う訳ですが、これは差別用語だといけないですが、やはり東南アジアの人達は、経営やらせるとドンブリ勘定な訳ですよ」

藤「(笑)」

川島「そこに対して、やっぱり華僑の人達は、きちっと帳簿をつけてやるというので、過去100年の間に東南アジアの金融関係とか商社関係ですね。他国と商売をするみたいな所は、かなり華僑が押さえています。だから、日本の企業も東南アジアで何か事業をしようと思った時に、必ずと言っていいぐらい華僑と組まなければならないようなところがあります」

水島「そうですね」

川島「ベトナムは色々な特殊な事情があって華僑を追っ払ってしまいましたが、ミャンマーは2%ぐらいしか居ない華僑の人口が、98%の経済を牛耳っているっていうようなことを言われて…」

一同「う～ん」

川島「似たような状況は、インドネシアでもある訳ですね。そういう意味では、華僑は大変に注意深い人達で、政治の前面に出るのを極めて嫌っていて、政治の前面は、そちらの人を立てて、要するにバックに居て金の力によって動かしていると。

そのことは、そこに住んでいる人達には、よく見える訳ですね。あの政治家は誰から金を貰って、その利権で動いているというのが見えるので、極めて中国に対しては悪い感情と警戒心を持っているというので、そういう意味でも日本からは与し易いんですね。ただ、私は人の悪口を言うのが好きだから言うんですが…」

藤「(笑)」

川島「三文マスクを言っている言い方をすると、いや、これは良いチャンネルだと思いますが、何かあると、やっぱりあの政権は中国の意を受けてやっているんじゃないかという報道が日本でよく流れるんですが、ベトナムでもそうです。ついこの前も習近平さんが来たので、やはりベトナムは中国の傀儡政権だと。

同じ社会主義で、というような論調で流れる訳ですが、中で見ていると、今、トー・ラム（蘇林、Tô Lâm）さんは、ある意味でベトナムの現状について非常に困っているんですね。ベトナムの事を最後に言って終わりますが、今、アメリカから46%の関税をかけると言われていて、7月の何日かですか、そこまでで交渉しているんですが、交渉ははきとして進んでいないんですね。ベトナムも悪いんですが、中国の迂回生産の先になっているんですね」

大井「うんうん、うん」

川島「中国から部品を入れてチョコチョコッと組み立てて、アメリカに輸出すると。これを止めてくれて言われて、やめようというようなことをしていたら、習近平さんが来て、念を押されたんですね。お前は分かっているんだろうなと。それで、その時にベトナムはトランプさんとも交渉があるからとは言えない訳ですね。解りました、解りましたと。

習近平が来れば最大のおもてなしをしちゃう。それを日本のマスコミは、聞いて来ると、ああ、やっぱり習近平とベトナムは組だったんだっていう風にするんですが、内実は非常に困っていて、どうしていいのかも分からないと。それから、ここはベトナムの方で色々な忖度が起きている訳ですが、結局のところ、今のアメリカのトランプって言うか、アメ

リカの考え方は中国を抑え込みたいと。

だけど、その為に中国を抑え込むことによって、アップルの値段が上がっては困るということで、逆に言えばベトナムで造らせてベトナムから買っているなら、中国の労働者は、職を失う訳で、そういう意味ではベトナムを使えるのではないかという風に考えているんじゃないかという風にも思っているんですね。でも、この辺、全く、よく分からなくて、現在、水面下で非常に神経を研ぎ澄ませて交渉を行っています。

最後に一つだけ、お話をして止めます。F16戦闘機を買う、買わないという話がありまして、F16戦闘機は100億円ぐらいですね。それで買って、そのあと部品を買って、パイロットの訓練をすると、また100億円ぐらいかかるそうです。だから1基200億円ぐらいで、例えば100基買えば、それで1兆円から2兆円の金がアメリカに流れるのでトランプも喜んでくれるんじゃないかということがあって、実は、この話は、今から1年半前にバイデンがベトナムを訪ねた時に出て来ているんですけど」

大井「うん」

水島「うん」

川島「この二つの出所が、二つとも、これは向こうに行って判るけど、ロイターですね」

水島「はい」

大井「ああ」

川島「ロイター通信が、アメリカの情報筋から得た情報を流しているので、ベトナム政府は、だんまりを決め込んでいる訳ですよ。でもベトナムでは、よく言われていて、これは、一流のアメリカの外交戦略であると。これによって中国はカッカ怒るし、プーチンも今迄はミグ戦闘機を買ってきてくれていた訳で（笑）、スホーイとか、それを買ってくれなくては困るので圧力をかけて来ると。

ベトナムは今、そういう意味で、この戦闘機の問題を含めても股裂き状態になって、非常に困っているというのが現状です。ですから、そのような状況にあるグローバルサウスというのは、日本に取っても非常に交渉し易い相手であるし、日本が東南アジアとWinWinの関係はつくり易いと思います」

水島「うん」

川島「日本は軍事的プレゼンスを東南アジアで持つ気は全然、無いので」

水島「うん、うん」

川島「ですから、もう少しグローバルサウスという問題が出て来た時に、東南アジアのことを考えてみて戴くのもいいんじゃないかなあというように思っております。以上です」

水島「大変、面白いお話だったと思うんですけど、聞きながら川島さん程の認識を日本の外交官や政治家が持っているかって言うと、極めて疑問じゃないかっていうね」

川島「それはね、一つはベトナム・スクールって無いんですよ」

水島「ああ～チャイナスクールってあったからね」

川島「だから、要するにチャイナスクールだったり英米系のスクールだったりしてきて、みんな、3年間ぐらい来て、経産省の官僚も来ているんですけど、経産省の官僚も言われて初めて行きましたと。川島先生の方を読んだら面白かったですとかいう感じで…」

藤「いや、もう、その通りです」

川島「その通りですよ」

藤「(頷く)」

川島「辞令が来る前の日までベトナムに行くなんて思っていなかった人が来るので、そういう意味では大使館には日本人だけで60人くらい居るんですけど、素人の寄せ集めというのが、恐らく日本の途上国外交の現状だと思います」

水島「全く、そうだと思います」

川島「(頷く)」

水島「私も衛星放送のフィリピン・チャンネルとか、マニラでケーブルテレビをやっていましたから、おっしゃることは、よお〜く解ります」

川島「そうですね」

水島「ね。本当に何も勉強していない」

川島「そうですね。大使館っていうのは素人の寄せ集めですから(笑)、こんなことを言う
と怒られるかもしれないけど」

水島「いや、マニラの地方新聞の記者を雇って、それに取材させて英文で書きますから、
それを日本語に介して特派員でみたいなね、東京に送る。NHKから何から全部そうでした。
殆ど何もやっていない。大事なところでは、EDSA革命というのが起こった時に私は
行きましたけど、日本の記者は誰も居ないですよ」

川島「ああああ、ああ」

水島「本当に。それで大使館へ行ったんです。当時、大使と仲が良かったから。それで館
内に入ってみたら、みんなで、テレビを観て(笑)」

一同「(笑)」

水島「どうなるかってテレビを観ていた。それで懇意にして貰った大使は、その時、マニ
ラにある最高級のゴルフクラブに居たんですよ。そうしたら、みんな、朝日新聞と現地の
新聞が叩きまくった」

藤「(笑)」

水島「でもねえ、その大使と一緒に飯食った時に、涙ながらに言いましたよ。悔しいと」

川島「うん」

水島「実は、あそこが一番、情報が入るんだと。どういう状況で国軍が、どう動いている
とかね、そこへ行くのが一番、いいんだっていうね。だから行っていたんだと。ゴルフな
どやっていないと。そういう状況ですからね、ちょっと真面目にやることが出来ないって
いうねえ。それからマニラもおっしゃるようにフィリピンも7つぐらいで、一個は、昔、
スペイン系って言われていましたけど、今はそれも無くなっちゃったっていうね」

藤「ああ、そうですか」

水島「ええ。最大のテレビ局をやっていたところが潰れちゃったっていうねえ。だから、
残骸は残っているのか判りませんが、あとは全部、福建チャイニーズの…」

川島「チャイニーズですね」

水島「おっしゃるように、それが支配しているんですね。はい。まあ、こういうのを踏ま
えた上で、大井さん、お願いします」

大井「はい。私は国際金融の方をやっておりまして、金(かね)の流れとか、それに伴っ
て今、関税ですね。トランプ関税が世界を席卷するみたいな感じで、川島先生が今おっし
ゃったようにベトナムもそうですけども、トランプが行って、もう踏み絵ですよ。どっち
につくんだと。自分達の方に来るのか習近平の方に行くのかって、アジアでも踏み絵をや
った訳ですけども。

そういう意味で、私は今回のグローバルサウスとかBRICSの感じで言うと、BRICS
Sはブラジル、ロシア、インド、チャイナで南アフリカが入るんですけどね。そのBRICS
SのCのチャイナが完全に抜けて、トランプは最初から中国封じ込めで動いていますか
ら、関税の交渉についても、中国封じ込めで、もう世界をどっちに、俺につくのか、それ
とも中国側につくのかっていうぐらいの激しい、非常に解り易い外交を展開していますよ
ね。

そういう意味では解り易い。私が注目したのは5月13日から16日にかけて、トランプさんが中東を訪問しましたね」

水島「うん」

大井「そのあとインドに行ってというところで、もうニュースで流れましたけども、サウジとかUAE、カタールがアメリカと経済協力しようぜ、3日で2兆ドルっていうことで、凄いディールがあった訳ですね。その時、アメリカは、ディールをするっていう意味がAIですよ。半導体です。AI半導体輸出規制を見直してやるから、とにかく俺達と一緒に貿易しよう。関税もちゃんとやろうぜっていうことで、じゃあ、サウジとかアメリカの兵器を買いなさい。自分達、アメリカは今、掘って、掘って、掘りまくれですから、原油価格を、どういう風にお互いにカルテルをつくってコントロールするかみたいな、資源の一つの利益共同体みたいなものをつくって、航空宇宙産業とか、まあ、色んな意味で、中東に行って握手してきた訳ですね。その時、イスラエルを訪問しなかったっていうことで、今迄のホワイトハウスのやり方と非常に違って、そういう意味では、グローバルサウスの方を向いて、きちんと自分の関税外交をやっている訳ですね。

そのあとインドに行って、交渉して帰って来た訳ですけども、その外交と関税の交渉で、それからイランを囲い込むとか、イランの金と影響力を中東の中で弱めていくとか、色んな策をやった訳ですよ。それで、今、私は、そういう意味で非常に注目しているのが、AIの、さっきベトナムの方でも出て来ましたが、半導体の輸出規制の緩和に関してですけども、バイデンの時にAI半導体輸出規制で、インドとかサウジもそうですけども、一応、安全な国と危険な国と、それから全くダメな国って赤、黄、青に分けて国々を分類したんですけども、今、トランプがやろうとしていることは、インドとか、それから中東にそうしたアメリカの新しいAIの拡散ルールを出して、お互いに貿易をしていくと、インドに対してもアメリカから、もっと兵器を買いなさいと。そうすると、インドは今迄、ロシアから色んな兵器を買っていたけど、それが途絶えるかもしれない」

水島「うん」

大井「日本に関しても、これからやって来るんですけども、日本に関してどういうネゴがあるかっていうと、恐らく日本は自動車とか半導体とか色んなことを言い出して、その代わりに日本では、アメリカから農産物を買いなさいと、要するに大豆とか、それから、ビーフとか色んな物、未だ品目で交渉をやって来て、これから日本も色々と大変だになっていくところですけども、特にBRICSの中から中国を排除して、アメリカがインド、ロシアと、しっかり手を組むと」

水島「うん」

大井「それでロシアに関してもウクライナを巡って、プーチンさんと手を握るって言うのかな、まあ、裏でちゃんと交渉して動いている。その裏には、やっぱり石油とか天然ガスの非常に戦略的な資源があって、アメリカは、どうして今、そういう世界の原油の生産の中で利益共同体をつくっているか、OPECもロシアも含めてですが、これは次のAI、さっきのAI半導体と関わるんですけども、次の産業革命がアメリカで今、起こりつつある訳ですね」

水島「うんうん」

大井「この間のNVIDAの28日の決算発表を見ても、はっきりアメリカでは非常に大きな規模で、もう次のパラダイムシフトが始まっている」

水島「はい」

大井「それにはAIファクトリーとかファクトリー・デザインとかっていう非常に巨大なものが、どんどんアメリカで生産拠点が造られていて、そこに大量のエネルギー、電力、

それから水が必要だと。それでアメリカが、それを供給して、アメリカに今、データセンターも5千か所以上あって、圧倒的にアメリカのデータセンターの数が多いんですね」

水島「うん」

大井「ですから、これから起こるA I半導体の色々な技術が、ただA Iのデータセンターで分析されるっていうんじゃないくて、その分析されたものが色んな産業に応用されていくと」

水島「うん」

大井「例えば、一つ解り易いのはドローンみたいな、今、武器兵器になっていますけども、ああいうもので、今迄、無かった新しい製品が世の中に出回ると。例えば産業革命って言うと、ちょっと話が飛ぶかもしれませんが、ジェイムス・ワットが蒸気機関を発明して、この蒸気の圧力で車輪が回ると。これが織機、要するにテキスタイルの織物に應用されて、それから自動車のコンバースション・エンジン、エンジンで回るっていうように何か一つのものが色んな産業に波及していく。

今、A Iの半導体の技術が、そういうように周辺の産業に物凄い勢いで波及している状況です。そういう今のパラダイムシフトに関して日本人って、あまりイメージが無くて…」

水島「本当に無いんですよね。はい」

大井「無いんですね。ある有名な政治家が、トランプさんが関税、関税って煩いと。トランプが、あと3年ぐらい経って、また大統領を辞めれば、これも無くなるんだろうみたいに一過性のものだという風に日本の政治家は思っているみたいで、いや、そうじゃなくて、今、世界中が変わろうとしていて、グローバルサウスとか、今の川島先生のお話もそうですけど、世界中が全部、トランプのビジョンで動いちゃっている訳ですね。その先に、A I半導体による新しい産業構造へのシフトがあって、その全部が見えているのに何故、日本は、そこにちゃんとコミットしないのかっていうことが、私にはよく解らないですね。何か遅れているっていうか、また、これで3周ぐらい遅れちゃって」

水島「そうですね」

大井「一番、恐ろしいのは、そうやって日本がどんどん遅れていくじゃないですか。で、さっき社長もおっしゃったように、日本はいつまでN A T OだとかヨーロッパにくっついてG 7の気分にいるんだっていう訳でしょう。でも、そんなことをやっている、トランプさんは就任から4～5か月で、ここまで来た」

水島「うん」

大井「あと、それが2年、3年経ったら、もう日本は取り返し付かない。今、G D Pで3位か4位か、もう5位、7位、10位って落ちていって日本が経済力を失ったら、ただの緩衝国家になり下がるんですよ」

水島「まあ、そうですね」

大井「で、日本…」

水島「なりつつありますね」

大井「なりつつある。中国、アメリカ、ロシアっていう大国に挟まれて、ボコボコにされるっていう、まあ、悲しいウクライナのような運命が待っている」

水島「そういう感じがしますね」

大井「はい。ということで、トランプの今の関税政策から見た中国外しと、それで彼がいかにグローバルサウスの中に影響力を浸透させていくか、踏み絵をさせているかっていう状況ですね」

水島「そうですね」

大井「はい」

水島「だから、おっしゃるように、本当にトランプが気の狂った男とかね」

大井「(笑)」

水島「変わった男とかね。そういう風に見ているけど、プロレスが大好きだったから」

藤「(笑)」

水島「芝居は、ほんと、やりますけど」

大井「芝居ですね(笑)」

水島「ほんとに頭のいい奴だと思いますよ。変わった男には違いないけどね」

大井「うん」

水島「それと本当に自分で言っているけど、やっぱり、おっしゃる様に、これは今、革命ですよ」

大井「革命だってねえ、もう…」

水島「産業革命の新しいプラグマが始まっているっていうね」

大井「はい」

水島「このことが解らないと、あいつは変わっている奴だから、あれが辞めれば元へ戻るとかね」

大井「うん」

水島「そんなことは、ありはしないんだけど、だから、そこら辺が日本いうのも…、それからEUですよ。19世紀、20世紀、21世紀まで続いたヨーロッパ中心の白人支配秩序とか文明とか文明観というのは全部、問われて、あまり尊敬されなくなっているというね」

大井「(笑)」

水島「尊重されないのに、俺達はまだトップだと思っているっていうねえ。そこら辺のところは、おっしゃるように本当に今の半導体、AIのね、こういったものの中にも表れているっていうかね」

大井「はい」

水島「いつまでも自分達は人類の指導部的な意識をね、やっぱりヨーロッパ、欧米っていうのはあったから、ところが、それが、また違う形でアメリカを再生させようとしているというかねえ」

大井「う～ん」

水島「これを解っているのが、だからプーチンとかね」

大井「ええ、そうですね」

水島「そういうことになっちゃうんですよ。習近平がどういう風になっているか、非常に注目したいところですけど」

川島「(笑)」

水島「この間の討論で紹介しておく、やっぱりトランプのサウジアラビア訪問とか湾岸諸国をやったのは、やっぱりサウジとアメリカとロシアを入れると、世界三大天然ガス、石油のあれになっちゃうから、これで、もう一つイランを手懐けてやれば…」

大井「そうです」

水島「少なくとも天然ガスまでのエネルギーは、もう、これで完璧に決められちゃう」

大井「はい」

水島「そういうことをやっている遠大なっていうか、そういう計画を持ってやっているんだと。だからロシアとの繋がりも、今、ウクライナで言うことを聞かねえなら火花でね、あいつはおかしいとか言っているけど、あんなものは芝居であってね」

大井「うん」

水島「結局はロシアと、やっぱり私は手を組むことがトランプだと思うんですけど、これも色々出て来ると思うので、じゃあ、藤さん、お願いします」

藤「はい。『BRICS、グローバルサウスの未来』というテーマで、こういうことを言うと、結構、水差しちゃって申し訳ないですけど…」

水島「いやいや」

藤「私は、トランプ政権が誕生して4か月以上経って、実は、BRICS、グローバルサウスの分は、もう終わったと思っているんです」

水島「おお」

藤「実は、このBRICSっていうのは非常に不思議な組織って言うか、鵜的な組織で、EUとかASEANみたいな地域に密接した連合とは違って、所謂、地球のあらゆる所で出来ているグループじゃないですか」

水島「そうですね。これはチャイナも入っている訳ですからね」

藤「それに類するものって、やっぱりG7とかG20ですけど、そもそもG7っていうのは1975年、第一次石油危機に対して先進国はどう対応するかということで出来た組織で、今やそうじゃなくて色んな事をやっていますから、その色は相当、薄れましたけど、それからG20はリーマンショックのあとに出来た組織ですよ」

水島「うん」

藤「でもBRICSって生まれる時のイベントが全く無い訳ですよ」

水島「そうですね。そういう意味ではね」

藤「ご存じの方も多いと思いますが、2001年にゴールドマンサックスのオニールが、当時、アメリカがITバブルの崩壊で景気が悪かったものですから、他に儲かる場所は無いかっていうことで、人口が多い所と資源の多い所に目をつけて、当時は南アフリカじゃなくてBRICで始まったんですけど…」

大井「うん、そうですね」

藤「それが2009年で、急に何かBRICが首脳会議をやると言って2010年に南アフリカが入ったんですけど、要は、そういう組織が出来た最初のイベントが全く無い組織であって、むしろウォール街が創った何かおもちゃが怪物になっちゃったっていう話で、色々言われていますけど…」

水島「うん」

藤「何となく先進国っていうか、アメリカやヨーロッパといった旧植民地諸国に対するルサンチマン、恨みつらみで纏まっている組織に、所詮、過ぎないというイメージがあって」

水島「まあ、それはそういうのはあるでしょうね」

藤「はい」

水島「現実にあると思いますね」

藤「はい。そのあとグローバルサウスも、元々専門家はグローバルサウスという言い方で言っていましたけど、これが、もう猫も杓子もグローバルサウスって言い出したのは、ウクライナ戦争からですよ」

水島「うん」

藤「何故かと言うと、当時、ロシアがウクライナに侵攻した時に、アメリカもヨーロッパも自ら手を汚したくないと」

水島「うん」

藤「経済制裁をかければ、ロシアは全部、お手上げだろうと思ってやった時に…」

水島「うん、うん」

藤「何故か発展途上国の方達が全然、その制裁に賛成してくれなかった」

水島「そうでしたね」

藤「ですから是非、皆さん、あの制裁に参加して下さいっていうお願いに行っちゃったものですから、元々グローバルサウスって第三諸国とか発展途上国というか、援助を受ける客体だったのが急に発言権を持つようになってしまったということですけど、ただ、このBRICSもグローバルサウスも、何故、このブームが起きた、バブルが起きたかって言うと、実はネガ的な現象で、アメリカとかヨーロッパが今でも、こいつら未だ牛耳っていると。それに対する反発から生まれて来た訳ですが、今、トランプ政権が立って、もうアメリカとEUは修復し難いぐらいに分裂しましたよね」

水島「そうですね、もう駄目でしょうねえ」

藤「はい。しかも、あとで、ちょっと説明しますが、アメリカも、とんでもないことになっちゃうと思うので、そうなるとうと、元々アメリカとかヨーロッパとか、旧ソの国に対する反発で生まれた人達が、もし反発する主体自身、まあ、別の言い方ですけど、頑固親父がやった時には反発するんですけど、例えば頑固親父が倒れてしまって、寝たきりになったら、息子も多分、反発心が無くなるのと同時に…」

一同「(笑)」

藤「多分、そういう現象が起きちゃうんじゃないかっていうことを思っている訳です。ですから、それを考えると、確かに川島先生がおっしゃった東南アジアというのは、私もおっしゃったことには賛成ですけど、無理矢理、グローバルサウスと考える必要があるのかどうかなっていうところがありまして、それから一つ、よくグローバルサウスについては、盟主が、例えば中国なのかインドなのかっていう、そういう罅迫り合いもありますけど、今、中国が今年、何かとんでもないことをしそうな訳ですね。これはオーストラリアの研究所がレポートを出してしまっていて多分、日本のメディアでも紹介していますが、どうも、その一帯一路って2016年ぐらいから本格的に貸し出しを始めて、今年、その期限が来たって、全部、債務を返済させるっていう行為に出るらしくて、それによって、多分…」

水島「苦しいから、自分もねえ」

藤「はい。発展途上国の50とか70ぐらいの地域が、本当にデフォルトを起こしちゃうんじゃないかと」

水島「うん」

藤「西側は御覧の通り、そのパリ・クラブっていうのがあって、そうならないように債務については運用とか、そういう組織があるんですけど、中国っていうのは本当に酷くて、町金と同じように引っ剥がしますから」

一同「(失笑)」

藤「そうならなかったら、例えばグローバルサウスのメインである中国がどうなるかということで、多分、中国も、皆さんご案内の通り、本当に経済が酷い状況ですから、やっぱり90年代の日本を経験している人間からしますと、本当に中国っていうのは、日本と同じか、更に4割、5割増しで悪くなっているっていうことが解っているもんですから、そうなると、来年、再来年に金融危機を受けてしまうと。もう、それどころじゃなくなっちゃうっていう話ですし…」

水島「なるほどね」

藤「それから、あと最後にアメリカについてお話ししますが、確かにトランプさんというのは、僕、ある意味で評価します」

水島「うん」

藤「政治家として。何故か、これ程、選挙期間中に言った公約を真面目に短期間で実行に移そうとする政治家は初めてですから。その上では非常に良い人だと思います」

水島「うん」

藤「ただ、先程、革命っていう話がありましたけど、革命って、どうしても短兵急でありますから、良い事でも、必ず拙速にやるから大失敗に終わってしまうっていうことがあって、今、その関税の問題で、あまり言われていないんですけど、実は、私も古い人間ですからあれなんですけど、今、トランプさんがやっていることっていうのは、90年代前半のクリントン政権一期目と同じですよ」

水島「どういう意味で」

藤「当時は日本だけに対して、やっていたんですね。スーパー301条、関税かけるぞと言って、とにかく市場を開放しろと」

水島「うん」

藤「だから、それを世界全体に、しかも、その相手が何かやるかっていうことの前に関税をかけてしまって、今、そういうことをやっている訳ですね。ですから、先程、川島先生がベトナムも慎重にやっているっていう話がありましたけど、多分、アメリカはベトナム迄、手が回っていないと思いますよ」

川島「回ってない、回ってない」

藤「だから、もう一律に何%にするなんて言い出していますよね」

水島「うん」

藤「実は、これを思いますと、第一期クリントン政権は日本に対して、とにかく貿易赤字を減らせとやったんですけど、失敗に終わっちゃったんですね。クリントン二期目に何が起きたかと言うと、ルービンさんというウォール街の重鎮が出て来て財務長官をやって、結果的にアメリカの貿易赤字なんか減らないと。その代わりドルが世界に流れますから、そのお金をウォール街に戻そうっていうことで強いドル政策をやって来たんですね。だから、この30年間はウォール街主導で、さっきもAI半導体っていう話もありますけど、結局、ウォール街でお金が入って来て、そこからシリコンバレーとか、そういう所に行って、お金が流れてイノベーションが起きたんですけど、多分、その流れが、実は無くなっちゃうんですね。これは経済学の常識ですけど、貿易収支の赤字と国の資本収支の黒字とは多分、一致するんです」

大井「うん」

藤「ですから赤字になったら、その分、特に他の国に資本が行くっていうことはありますけど、アメリカはウォール街がルービンさん中心に、とにかく世界で一番、魅力ある金融市場にしようっていうことで、その貿易で流れたお金を全部、ウォール街に戻して、それで、30年間、上手く行って、若干、製造業の雇用は無くなったんですけど、今、アメリカの年金って4割近いですから、株が上がればハッピーな訳ですね。株は、もう30年以上、上がって来ていますから、アメリカ例外主義っていう話になっているんですけど、もし、貿易収支が本当に赤字が減ったら、ウォール街に入ってくる金が無くなるんですね」

水島「うん」

藤「そうになると、30年間、その金融中心に大きくなってきたアメリカも、成功の方程式が無くなってしまうので、ウォール街にも金を下さい、その代わり貿易収支赤字も減らして下さいっていうのは経済学では成り立ちませんから。多分、そのことが起きてしまう。ですから正直言って、私は今、むしろ関税よりも、大井先生もご案内だと思いますけれども、アメリカの国債の問題」

水島「うん」

藤「米国債の問題が…」

水島「上がっていますねえ」

藤「今、問題をもっていますから、何処かで、かなり経済が急減速しますから、そのあとでアメリカもトランプさんは多分、残念ながら経済では何とも行かないので、今の大学に対する抑圧も含めて文化闘争的な形で、とにかくMAGAと言われている狂信的な支持者を纏めていくっていうことを考えて行きますから、その意味ではアメリカも悪くなっている。ですから、その中で、私は『大油断』っていう本を去年、出しましたが、私の考えているイメージは、もう世界全体が学級崩壊を起こして…

一同「(笑)」

藤「とにかく戦国時代みたいな乱世の時代になるだろうと、まあ、その中にあって最終的には大きな国、小さい国もあるんですけど、その中にあって日本は、東南アジアは東南アジア、個別に、しっかりと本当に過去の歴史とか色々お互いの国柄の親和性を考えていて、合従連衡しなきゃいけないんですけど、残念ながら日本の外交って言うか、外務省は凄く教条主義的で…」

水島「まあ、分かんないですよ。うん」

藤「先程、東南アジアスクールが無いっていう話がありましたけど、私は一時、ロシアとパイプライン交渉をやった時の経験から言いますと、外務省とロシアスクールは、もう、無いですね」

一同「ああ～、う～ん…」

藤「全員、彼らは英語経由のロシア情勢しか見ていません。だから、とにかく自らの国益じゃなくて、アメリカに嫌われないようにするには、どうすればいいかっていうことしか考えていませんから、それを考えると、本当は、例えば語学が出来るチャイナスクールがあるのかなと。ロシアスクールも無い。EUスクールも無い、ドイツスクールもない」

水島「うん」

藤「多分、全てアメリカ経由で、アメリカに嫌われないような形で外交すればいいっていうことで、とにかく、もうアメリカばかり見ているという状況を考えますと、さっき言った戦国時代で合従連衡の時代に、お互いに付かず離れずっていう形の外交、今、出来るかって言ったら全くできない状況ですから、非常にお寒い状況ですけど、多分、私は、その『BRICS、グローバルサウスの未来』っていうことじゃなくて、どんどん国際関係が学級崩壊する中にあって、果たして日本は目覚めることが出来るかどうかというところが、今、最大の関心でございます。以上です」

水島「今言ったことは、本当に大事な論点になると思うんですね。言葉の中に出なかったから、今言った白人以外の秩序に対するアジアにしる、アフリカにしる、ルサンチマンっていうのも勿論、植民地とか色々あったんだけど、それはあるけれども、もう一つは、やはりルサンチマンじゃなくて、その民族意識っていうか、所謂、反グローバリズム、つまり、お前達の価値観を白人のヨーロッパ的な価値観を俺達に押し付けるんじゃないと。私はベトナム戦争で凄くホー・チ・ミンに感心していたのは、勿論、共産主義者だったかも分からないけれども、それ以上に民族主義者だったっていうね。

こういったものを重要視して今、その中に、やっぱりBRICSでもチャイナは、まあ、ちょっと、さっきも外していたけど、アメリカの敵になっているっていうことで、今言ったように、その部分で反グローバリズムという大きな流れがあるから、纏まりの問題としては、勝手に、とにかく人の国の言うことを聞きたくない、まあ、ブルキナファソ

(Burkina Faso) っていう小さいアフリカの国の話を、最近、よく紹介しているんだけ

ど、例えば、ブルキナファソの大統領がマクロンに、うちの植民地で昔から仲良くして友達だからね、そのまま基地を置かせてくれって言ったら、友達だから基地を置くって言うけど、あんた、アメリカやカナダやオーストラリアにフランスの基地があるのかって言って（失笑）、答えられなくなったと。

つまり、その感じで、或いは、もっと言えば、今、アメリカの軍の参謀総長が、あそこは金の産地ですから、そのブルキナファソの大統領は、やたらと、金を私用に使っちゃっていると言っているけども、こういう形で、ずっとやってきたことに気が付き始めているところがあるから、やっぱり反グローバリズムっていうのと、もう一つは今言った、それぞれの国が自分達の運命を決めたいっていうね。

それはトランプがそれを一つやるのと、ずうっとオバマ政権、バイデン政権まで続いて来たグローバリズム・リベラリズムっていう中で、唯一反抗していたっていうか、言うことを聞かなかったのが、ロシアのプーチン政権だったっていうね」

一同「うん」

水島「だから、そういうこともあるんでね。一つの これからの世界の人類をどうするかという中で言うと、藤さんが言っている様に、トランプが本当に、今、成功するかどうか、かなり、それは、だってFRBから何から、はっきり言うと国際金融資本とか武器商人から何から全部にね…」

藤「まあ、でも本当に凄い事をやっていると思いますよ」

水島「挑戦するからね」

藤「はい」

水島「だから、それは余計、そういう意味では消される可能性もあるしね、ただ、これは大きな革命的な事をやっているっていう感じを、私は持つんですね。今言ったようにロシア、アメリカ、インドとか、今、中東で言うとサウジですよ。それからイランもロシアと非常に近いから、イスラエルの問題は今、ああいう虐殺を続けていますけど、ほんと、最後はどうなるか見極めることで、中東の和平っていうのが出て来るんじゃないかと。ネタニヤフは排除されるかも分かんないということも含めると、結構、壮大なイメージで中東和平とか、最終的にはロシアと一緒に北極海、カナダ、グリーンランドも含めて、これを、みんなでやろうっていうことになると、相当、先まで見た戦略的なトランプの後ろに居る、まあ、トランプもそうですけど、戦略的なグループじゃないかなあと。だから、ただ、やっぱり、それはシティにしる、ウォール街にしる、こういう人達は既成のものじゃないですからね。これは絶対に抵抗するし、折り合いをつけるとか、つける真似をしながら、とか、これから、すごいことが起こると思っているんですけどね。もう、これは是非、藤さんのここの問題、皆さんにも意見を聞いてみたいと思います。これは、非常に大事な話だと思います。じゃあ、ポリーナ・ギンズブルグさんというか、ポリーナさんでいいですか」

ポリーナ「はい。是非（笑）」

水島「はい、じゃあ、ポリーナさん、お願いします」

ポリーナ「はい。有難うございます。まず今回もお招き下さりまして有難うございます。私はロシアのサンクト・ペテルブルグ出身のポリーナと申します。本日はBRICS、グローバルサウスがテーマですが、主にロシアの歴史や文化の面からお話出来ればと思います。その前に日本のロシアに対する報道は、実際に事実に基づいているものが非常に少なく、本当に酷いです。

やはり、どういう国か、歴史、文化を、もうちょっと知って戴くことで、今の国際情勢も見えて来るのではないかなという風に思います。最初にお伝えしたいのは、何故、ロシア

がヨーロッパ以外の国々と、これ程、関係が強いかっていうことについてです。恐らく、日本の多くの方々はロシアがヨーロッパの国だと思っ方が多いかと思ひます。でも実際、地図を見ると判ると思ひうんですけども、ロシアはヨーロッパとアジアに跨る国家です。私の出身のサンクト・ペテルブルグは、実際にヨーロッパに非常に近いんですけども、モンゴル地域ですね、あの辺に行くとアジアに近いですね。そこに住んでいる人達の顔を見ても、やはりアジアの血が混じっていることが判ります。恐らく日本の方々は、ロシアにはロシア人しか住んでいないと思っ方が多いかもしれませんが、イスラムも含めて非常に多くの民族が住んでいる多民族国家です。

やはり、この地理的な条件がロシアの中で自分達はヨーロッパでもあり、アジアでもあるという、ユーラシア国家という考え方を生んできました。ですから多くのロシア人にとっては、アジアや中東の人達と関係することも何の抵抗も全くないですし、実際にプーチン大統領はシベリヤの開発とかヨーロッパ以外の国々と関係強化を進めています。

ただ特に近年は、ロシア政府の東方シフトですね。その傾向が非常に強まっているのが特徴です。それには、恐らく大きく3つの理由があるのかなという風に思ひます。まず、一つは経済的な理由ですね。やはりアジアや中東の国々と関係を深めることで、外交や経済のバランスをとることです。今、実際にBRICSの世界人口に於ける割合は約42%以上ですかね、経済規模も30%以上になっていますから、これから世界で非常に大きな存在になっていくかなという風に思ひます。

なので、こういう風にアジアや中東の国々と関係を深めることで、やはり、ヨーロッパやアメリカに依存しなくていい、頼らなくていい国家づくりをプーチン大統領が進めているのかなという風に思ひます。

二つ目は、やはり価値観の問題ですね。ロシアはソ連崩壊のあと、メチャクチャになりました。プーチン大統領の下で新しい国造りを進めてきました。こういったメチャクチャになった国を一つに纏めていく為にも、プーチン大統領はロシアの歴史、伝統、宗教を大事にする国造りをしてきました。

一方、ヨーロッパの多くの国は申し訳ないんですけど、ちょっとよく解らないLGBT、まあ、こういった過激なジェンダー政策や移民政策等といった、自国の歴史や伝統と関係ないことをしているという風に見ています。プーチン大統領は、そういうヨーロッパの指導者を『悪魔主義』という風に言っています。

ヨーロッパは自分達でも、そういう価値観で良ければいいんですけども、やはり他の国にも広げようとしています。伝統的な価値観や宗教心が、恐らく未だ残っているアジアや中東の国々もロシアと同じように感じているのではないかなという風に思ひます。なので、そういったBRICSに対しての関心が非常に高いのではないかなという風に見えています。

最後、3つ目はウクライナ紛争。特別軍事作戦の影響です。この紛争の原因は非常に複雑で、何か頭がおかしいプーチン大統領が、いきなり侵略したのではなく、やはり、そこは、歴史、民俗、宗教といった複雑な原因があります。主にはヨーロッパの側にアイデンティティを求める西ウクライナの人達とロシア語を話して歴史的にロシアと結びつきが強い、東部、ドンバス地方のロシア系民族との争いが原因です。

この紛争が始まってから、ヨーロッパはロシアと全面的に対立する姿勢を執りました。しかしアジアやアフリカは、中立的な立場を執りました。特に制裁が非常に多いんですけども、インドや中国等の国はロシアの経済を支えています。これで、ロシアは、やはり自分達が東方シフトする、東に行く、異なる世界であるヨーロッパではないという考え方が出ました。

プーチン大統領も実際に言っているんですけれども、やはりヨーロッパに裏切られたという風に言っています。以上のことから、ロシアは、これから、もっともっと東方シフトを進めてBRICS、グローバルサウスとの関係強化を図っていくかなという風に思います。

BRICS諸国は人口も増えていますし、エネルギー資源を持っている国が多いので、これからBRICSの参加国が増えていくと思いますし、これまでアメリカ、ヨーロッパ中心だった世界の在り方が変わって行くのかなという風に思います。こういったことを、プーチン大統領は『世界の多極化ですね』という風に言っています。

少しロシアの現状についてお話しますと、今回の特別軍事作戦でロシアはむしろ強くなったと思います。アメリカやヨーロッパは、これだけウクライナを支援してもロシアの軍隊には勝てませんでした。経済の面でも、あれだけ制裁を受けてもロシアの経済は、しっかりしていてヨーロッパに依存しない。自給自足の経済作りを進めています。社会に於いても、非常に愛国者が増えています。実際にプーチンの支持率は今迄より上昇し、80%以上になっています。

外交面でもBRICSに加盟しようとする国は増えていますし、あとは終戦記念日ですね、80年記念のパレードに沢山の国々のリーダーが実際にロシアに来ていました。中国を始めBRICS、グローバルサウスの国々と強い関係を築いて…」

川島「ベトナムも行きましたよ」

ポリーナ「はい、ベトナムも行きましたね（微笑）。プーチン大統領の色々な演説を見ると、プーチン大統領が実現しようとしているのは、自国の歴史や伝統をしっかり守って、食糧やエネルギーを自給して、自分の国の事は自分で決める、決められる、守ることのできる主権のある国家、国だと思います。人口や天然資源、これからの成長の可能性を考えると、やはりBRICSはG7よりも様々な世界に大きな影響を与えていくのではないかなという風に思います。

まあ、ずっとロシアは弱いとか崩壊するという風に言われているんですけれども、まあ、どうでしょうね、ヨーロッパとか日本の方がちょっと厳しい状況になっているのではないかなという風に思います」

水島「まあ、そうですね」

ポリーナ「はい」

水島「丁度、私も別の枠でも言ったんですけど、今、アメリカのトランプは本当にロシアとくっつきたいと思っています。それは得になるけど。ただね、ロシアは、もう一つ、強かだね、中国とも仲良くして、それでロシアと中国がくっついたっていうのは、一種のウクライナ戦争をずうっとやれた一つの大きな理由になっている訳ですよ」

ポリーナ「はい」

水島「北朝鮮も含めてね。そうするとね、フリーハンドでトランプと習近平を手玉に取るというね。どっちに付くかでも、どっちでも全然いいし、こういうことを非常にプーチンは今、やっているんじゃないかっていうね。これは、良い悪いとかじゃないですよ」

ポリーナ「う〜ん…」

水島「つまり、そういう意味で核兵器の戦略核とか中距離核とかを見て、中国とロシアの核を合わせたら、とてもじゃないけど、アメリカの核は敵わないんですよ」

ポリーナ「うん」

水島「ところがロシアとアメリカが持ったら、一緒にくっついても、これは中国がいくら強化しても敵わない。そういう状態があって、はっきり言うと、プーチンが一番、都合のいい、どっちも仲良くしましょうねと。それだけの政治的な力量を持っている人ですか

ら、こういうことと、もう一つは中国にとって一番、弱い食糧の確保やエネルギーの確保を、ロシアもアメリカも両方共、自前でずっとやれる。

だから、こういうようなことを考えて、トランプがサウジアラビアを押さえて湾岸のドバイとかあっちへ行くと色々しているのは、そういう意味では、エネルギーを全部、確保する。結局、それがあると、イスラエルをコントロールするのも出来るようになるとかね、実は、この連中は誠に頭のいいことをやっていて、特に、プーチンのやっている戦略的な外交っていうのは凄いというね。

それと、もう一つは、纏めてある程度、言っているんですけど、あとね、我々の国とかE.U.の国が独裁者はいけないって言うんですよ。例えば、今、80%の支持率があるって、その通りだと思いますよ。だけど、そうなる独裁者だと言い出す訳ですよ。

さっき言ったブルキナ・ファソ (Bourkina Fasso) もそうだし、暗殺されたリビアのカダフィもイラクのサダム・フセインも、みんな、独裁者。でも、みんなは喜んで、一番、幸せだったって。あのリビアは中東で最高の生活水準だったとかね。

つまり、アメリカがオバマ時代にやって来た、バイデン時代にやって来た何とか革命とか民主革命とかいったものは全部、内戦を起こして、石油利権を自分達で全部、取っているというね。こういう事を知っているから、植民地時代のルサンチマンだけじゃなくて、こいつらは、いい顔して民主主義だ、自由だとか言う事を教師みたいに教えに来るような真似をして、結局、俺達から金をふんだくって内戦を起こさせていると。こういうねえ、うらみつらみじゃないけどね (苦笑)、そういう不信感を、ヨーロッパ、まあ、所謂、G7に対して持っているんじゃないかっていうねえ。こういうのもあって、今の、お話を聞いてね、ロシアは、それをちゃんと解っていてね、まあ、一番、攻められている所だから」

藤「いや、だから90年代の塗炭の苦しみが大きいですよ」

水島「そうだよねえ」

藤「さっきポリーナさんがおっしゃったように、旧ソ連時代の資産を投げ売りしちゃって、それをユダヤ系資本が二束三文で買って」

水島「全部、取っちゃう。そうだよね」

藤「今、日本では、ミハイル・ボリソヴィチ・ホドルコフスキー (Mikhail Borisovich Khodorkovskii) って、まだ可哀想な人だと言われているんですけど、あいつが一番、悪いんですよ」

ポリーナ「とんでもないです」

藤「だからホドルコフスキーがユコス (Yukos) という会社を潰してロスネフチに入れたから、プーチンさんの人気って物凄く上がった訳ですよ」

ポリーナ「(頷く)」

藤「だから、やっぱり、それぐらい90年代のソ連崩壊後の負の体験していて、若い方はなくなったので、若干、世代ギャップがありますけど、やっぱり中年世代以上はそうだし、やはりプーチンさんは今、『祖国防衛戦争』って言っていますよね」

ポリーナ「そうですね」

水島「まあ、あのう…」

藤「そうなれば、やっぱりロシア人も纏まりますから」

水島「そうだよね」

藤「それは強いですよ」

水島「そう。だから、今言った何かの利害が一致して、よし一緒にやろうぜって言った奴が今、分裂し始めている。G7もね。だけど、藤さんが今、丁度、言ってくれたように何か、あまり色んなイベントが無いまま、ずるずる集まって来たけど、ああ、こうやって、

一緒になるとアメリカにも反対出来るし、中国にもある程度、抵抗できるとか、色々便利にしているっていうね、やっぱり、これから問題じゃないかなという気もするけど」

藤「まあ、それは所詮、鶴は鶴でしょう（笑）」

水島「なるほど。それは、また、ちょっとあるよね。はい。有難うございます。じゃあ、アリベイさん、お願いします」

アリベイ「はい。皆さま、今晚は」

水島「はい」

アリベイ「アゼルバイジャン人のアリベイです。元々北海道大学の修士課程、博士課程にて日本とロシアの北方領土問題等を研究してきた背景がありますから、今日、ここに呼ばれていると思いますけども、主にロシア関係について今日も配信していきたいんですが、今、現在はYouTubeでもアリベイ・チャンネル、中国の経済サービス、アリベイじゃないですからね」

一同「（笑）」

アリベイ「アリベイ・チャンネル『ベイ』ですから、点々が付きます。毎日、日本とロシア、特にロシア関係、ロシアからの視点を中心に発信をしている者です。現在、紹介にも出ていますけど、アゼプロという会社も創ってアゼルバイジャンの農産物などを日本に輸入して、百貨店等で販売もしてまして、ロシアからも輸入したいんですけども、日本の銀行さんがロシア向けの送金を許してくれないから…」

藤「ああ、それは無理ですね」

アリベイ「はい」

藤「無理です」

アリベイ「出来ていないんですが、その時代も来ることを期待して、今はアゼルバイジャンだけに留めています。今日はパネリストの皆様方の話を真面目に聞かせて戴き大変、楽しく聞かせて戴きました。特に川島さんのベトナムの話は大変、勉強になりました」

川島「おお」

アリベイ「まあ、ベトナム戦争とか、私もソ連人としてギリギリ昭和生まれですから」

川島「ああ」

アリベイ「ソ連人として生まれて来た訳ですから、我々もベトナム戦争のことも割と知っていますし、当時、アゼルバイジャン人もソ連人として、ロシアのソ連側から、かなり、この問題を勉強していますし、アメリカが世界で初めて戦争に負けた。戦争でも事実上、戦争ですから」

藤「そうですよね」

アリベイ「ベトナムの話は大変勉強になりました。有難うございます。それから大井さんのアメリカのね、今のAI、IT関係の、産業革命が実際に起きているんじゃないかっていう話は大変良くて、私も全世界が本当にトランプ型というか、現実主義。事実、現実を直視して動いているのに、何故、日本は遅いんだということで（失笑）、私も日本が大好きな外国人としては本当に日本の悪口は言わないんですけど、日本を批判するとなると、やはり日本人も遅過ぎる。特に政治家は遅過ぎる」

藤「うん」

アリベイ「変わらない、変わらないというのは良くも悪くも、今は悪いんですけど、やっぱり今は変わる時代ですから、今、変わらないと、どんどん遅れてしまう」

大井「う〜ん」

アリベイ「ものによっては日本の伝統を守ることは勿論、大事ですけども、何でもかんでも外国に任せる。外人ばかり入れて衆議院議員にして日本を変えていくというのもあり得

ない話ですけど、ただ産業革命とかね、やっぱり見るだけでは遅れてしまうので、もう、3〜40年も日本が遅れてしまいますから、そこも大井さん、大変、有難うございました。大変、勉強になりました。それから藤さんの…」

藤「え、何ですか」

アリベイ「経済産業省で同じ官僚の方なのに、よく別の官僚の皆さんをね、外務省を批判できるというのは凄い」

一同「(笑)」

アリベイ「凄い」

一同「(笑)」

川島「浮いているんじゃない(笑)」

一同「(笑)」

藤「そういうのは当たり前ですよ」

アリベイ「我々、アゼルバイジャン人としてはねえ、同じ官僚に対して中々出来ないことですから」

藤「ああ、そうですか、そういうのは当たり前ですよ(笑)」

アリベイ「当たり前ですよ。それが中々楽しかったです」

藤「(礼)」

アリベイ「経済産業省の人が…ね。まあ、川島さんのお話の中にもね、ベトナム・スクールが無いとかロシアンスクールが無いとか、藤さんのところでも出ましたけど」

藤「形ばかりはあるんですよ」

アリベイ「そうですね。でも実際は蓋を開けて見ると、中味は何も無いですよ」

藤「(頷く)」

アリベイ「アゼルバイジャンも一緒ですよ。アゼルバイジャンにある日本の大使館の批判にもなりますけども、実際、私もバックにあるアゼルバイジャンにある日本の大使館のお陰様で日本に奨学金を戴いて来た者として、裏切られたっていう感覚になるかもしれませんけど、だからこそ本当の事を言わないといけないんですが、アゼルバイジャンにある日本の大使館もそうですよ。ロシアンスクールは無いかもしれませんが、ロシア語が出来る人か、英語、トルコ語が出来る人しか、アゼルバイジャンのバックにある日本大使館はやって来ないんですよ。

北海道大学でアゼルバイジャン関係で博士号を取られた、名前は出しますが僕の先輩の方も居るんですけども、その方はアゼルバイジャン語が得意ですよ。昔、北大の職員になる前に、大使館の面接に臨んでアゼルバイジャンの日本大使館で仕事をしたかったんですけど、トルコ語とロシア語で面接をしましょうということになっちゃって、彼はアゼルバイジャン専門でアゼルバイジャン語が出来るのに、でも当たり前ですけどトルコ語とロシア語は出来ないんですよ。よく喋れない訳で、まあ、学者ですから読めるんですけど。日本の殆どの学者は基本的には外国語を読めるんですけど話せないでしょ。そこで落ちた訳ですよ。

やっぱりアゼルバイジャン関係をやっている外務省の人達も、基本的にアゼルバイジャンのことをよく分かっていないですよ。ロシア語の文章を読んでいるか、トルコ語からのニュースを読んでアゼルバイジャンの情報を纏めて、日本の外務省は多分、情報を発信していきけど、それも非常に大事な事ですけども、本当に、それでいいかどうか。また別の課題ですよ。

今日はロシアの話もね、ポリーナさんが、かなりロシアについてお話されましたが、実際、制裁を受けながらも強い、逆に制裁があって良かったという話で、私も今回、このチ

チャンネル桜に3回目の出演ですけども、1回目は今日の宇山先生みたいに札幌からでした。2回目はモスクワから参加して、今回、初めて来られて、大変、皆様にお会いできて良かったです」

藤「良かったですね」

アリベイ「前回、私もそれについて少し話したことがあって、特にモスクワから入った時に話していましたが、逆にロシア側の官僚の皆さんが記者団から特に海外をいじる質問とかを受ける時、逆に制裁してくれて有難うございますと言うんですね。皆さんの制裁のお陰で、私達はもっと強くなりましたと言うので、まさにポリーナさんの話は良かったと思います」

水島「うん」

アリベイ「今日、私が主に話したいのは、BRICSというのは藤さんのところでハプニングが何も無いという話がありましたけど、今、変わって来て、やはりG7ですよ。G7という地政学的な代替手段として扱われて来ているんですけども…

一同「う〜ん」

アリベイ「特に今、そう見えても未だそんなに時間も経っていないし、加盟国も10カ国しかないし、まあ、パートナー国も含めて19カ国しか無いんですよ。勿論、私が国籍を持っているアゼルバイジャンも含めて加盟申請をすることは出来ますけどもね、去年2024年に、特に中国のアゼルバイジャンに於けるプレゼンスが強くなってきて」

藤「そうですね」

アリベイ「中国の推薦、ロシアよりも中国の推薦があってアゼルバイジャンの外務省も、去年の2024年7月に考えて、8月20日に正式に加盟申請を申し立てた訳ですね。今、トルコもしたかどうか、あと未だ読んでいないですけど、トルコも真面目に加盟申請を考えていたことも、この時期、あった訳ですね。ただ、ロシアと中国が主要国ですけども、新たな加盟国を未だ待たせているんですよ。直ぐに加盟してくれないこともあるんですが、早かれ遅かれ、皆さんも加盟して来て、政治団体ではないんですが経済団体ではあるんですけども、何処かに真面目な事務局とかも未だ設けていない訳ですし、あくまでも、関係国の経済をいかにして強くしていくのかというのが、このBRICSの主な仕事で、それで中国は排除するという事は、大井さんの話にありましたけど中々難しいと思いますよね」

大井「う〜ん」

アリベイ「中国とロシアの関係も非常に強いし、因みに先月、アゼルバイジャンの大統領も中国を訪問しました。習近平国家主席と会談もして、実はアゼルバイジャン人と中国人が、要はアゼルバイジャン国籍と中国国籍がお互いにビザ無しで行けるようになった訳ですよ。決まったんですね」

一同「ほお〜」

アリベイ「でもアゼルバイジャン人は、中国よりも日本のことを昔から好きですよ。世界一親日国と言われていて、アゼルバイジャン側から先に2016年2月にビザを撤廃した訳じゃない訳ですけども、ほぼビザなしと同じです。日本人は日本国籍の人がパスポートでアゼルバイジャンに入国できるんですよ」

水島「うん」

アリベイ「本当に入国スタンプみたいな感じで入れる訳ですよ。でも、我々アゼルバイジャン国籍が日本に来る為に、まず、とんでもない資料を集めないといけない。集めて、日本大使館へ行って、まあ、資料が集まれば、大使館は割と1週間以内で結果を出してくれる訳ですけど、基本的にはビザをくれるんですが、でも、それまでの段階が凄く面倒臭過

ぎるんですね」

水島「うん」

アリベイ「だから途中で諦めてしまう人達も居ます。よっぽど神経が強い人じゃないと、でもアゼルバイジャンは日本に対して先にボールを投げた訳です。でも、日本は先程、冒頭にもあったように遅過ぎるということですけども、このBRICS加盟を考えた時に、アゼルバイジャンは簡単に入れるかどうかという話ですが、そうは思えないですよ。何故かと言うとBRICSにはインドという国もあります。インドとパキстанは戦争中ですよ。また、この間も話題になりましたけど、アゼルバイジャンはどちらかと言うとパキстанとガッツリ組んでいるんですよ」

一同「ああ〜」

アリベイ「御存じの通り、まあ、もう今は存在しないんですけども、昔、ナゴルノ・カラバフ共和国という未承認国家が存在していたんですが…」

藤「ああ、そうか、そうか」

アリベイ「その時に、インドが積極的にナゴルノ・カラバフのアルメニア人をサポートした訳ですね」

藤「そうかあ。なるほどねえ」

アリベイ「トルコもそうですけど、パキстанはアルメニアに大使館も設けないぐらいアゼルバイジャンの立場を守ったんですよ。アゼルバイジャンが5年前に、アルメニアの武装組織から解放したナゴルノ・カラバフ共和国と言われていた地域のラチン回廊という、まあ、実際、周辺地域ですけどね、アルメニアも主張していなかった地域ですが、そこもアルメニアの武装組織の支配下にあった緩衝地帯と言われていた場所ですね。そのラチンは今、解放されて5年経って、実はアゼルバイジャンは、この5年間で焼け野原のカラバフに3つの国際航空を造った訳ですよ」

藤「ええ〜っ」

一同「へえ〜」

アリベイ「3つです。その最後の3つ目がラチン空港で、そこに初めてアゼルバイジャンの大統領、トルコのエルドアン大統領とパキстанの首相が会って、そこで開会式をやった訳ですよ。これは凄い事ですよ。それまで焼け野原でアルメニア人が自分達の領土だと宣言していたんですけども、でも何もしていなかったですよ。でもアゼルバイジャン人が戻ったら、たった5年で、まあ、アゼルバイジャンの方が勿論、資金力もある。石油や天然ガスを持っているので、お金もアゼルバイジャンの軍事予算だけでもアルメニアの国家予算よりも上ですから、そういう意味で資金力も違うんですが、そこまでアゼルバイジャンがパキстанと仲が良い」

水島「うん」

アリベイ「そこでインドの反対があるんじゃないかと思うんですが、ただ先程、話のあった通り大井さんの話だったと思いますが、インドが結構、色んな国から武器を買っている訳ですね」

大井「はい」

アリベイ「実はイスラエルの話は、水島社長のところにありましたが、私は今日、イスラエル非難はしませんが、イスラエルは結構、世界に武器を販売しているんですよ。トップ10に入るぐらい武器を生産して販売しているんですよ。そのイスラエルから武器を買っている国ランキングでアゼルバイジャンは何と2位です」

藤「へえ〜」

アリベイ「1位は何処かと言うとインドですよ。そこでアゼルバイジャンは、イスラエル

と凄くガッツリやっているから、イスラエルというカードを使ってインドと仲良くしようと、それでインドの許可も下りる様に使うかもしれないと。あと中国とも凄くやっているから、中国に何かインドに言わせて、ごめんなさい、ということだね、インドの迷惑にならないように、それと同時に主要国の一つにロシアがあるので、勿論、有名な話ですから皆さんもご存じだと思いますが、去年12月25日クリスマスの日にはアゼルバイジャンの民間機8243便がロシアの南部、チェチェン共和国のグロズヌイに到着する予定だね」

水島「ああ、ありましたね」

アリベイ「事実上、カザフスタン西部のアクタウ近郊でロシアの軍隊に撃墜されて、誤射ですけどね、間違っって誤射されて撃墜されて、結局、緊急着陸をしましたけども、それに失敗して多くの人が亡くなった事件ですけども、それについてプーチン大統領はアゼルバイジャンのアリエフ大統領に電話して謝罪はしましたが、その謝罪の仕方が、ちょっと、どうかという話で、アゼルバイジャン側が怒っていて、アゼルバイジャンは大統領もロシアには行っていないし、それこそ5月9日に戦後80年の軍事パレード、80周年経って、中国の習近平国家主席を含めて30か国近い国のトップが行きましたけど、アゼルバイジャンも軍隊は派遣しましたが、アゼルバイジャンの軍人もそこに居ましたけど、大統領は行かなかったです」

藤「ああ、そうか」

アリベイ「やっぱりロシアと仲良くしたいけど、言う事も言わないといけないというのが、アゼルバイジャンの立場ですから、気まずい環境はありますけど、アゼルバイジャンとロシアの関係はずっと良くて、アゼルバイジャンの一般人から見たら出稼ぎ労働者もいっぱいモスクワとかペテルブルグに行くし、私の親戚にも多くの人が本当にアゼルバイジャンに当時90年代、ソ連が崩壊して新生ロシアになって、アゼルバイジャンも独立して、もうパンも買えない、お金はあるけど食べ物が無い時代があった訳ですよ。

その時代にアゼルバイジャン人がどんどんモスクワとかへ行って、もう本当に靴も無い中で裸足で行った人達がビジネスで成功して、ロシアでお金持ちになって今、プーチンの周辺にもそういったアゼルバイジャン系のロシア人、我々はそういう言葉を使うんですけど、要は民族はアゼルバイジャン人ですけどロシアの国籍を持っていると。

いっぱい居ますから、やっぱりアゼルバイジャンとロシアの関係、経済関係は凄く厚い。アゼルバイジャンの農産物の輸出先は基本的にはロシアです。トマトもそうだし、ワインとかもそうだし、ドライフルーツ、みんな、そうですよ。ロシア人にアゼルバイジャン・トマトと言ったら、日本人の熊本トマトと同じですよ」

一同「へえ～（笑）」

アリベイ「ブランドです、ブランド。高くてアゼルバイジャンより5倍、高く売れるし」

大井「おお～」

アリベイ「杏もね、アルメニア産も勿論、有名ですけど、アゼルバイジャン産も有名ですよ。ロシア人が一番、お金を出して買ったがるものですね。だから、それぐらいアゼルバイジャンとロシアの関係も非常に良い。だからロシアと中国の支援があって、アゼルバイジャンは早かれ遅かれ、インドの強い反対が無ければ加盟国にはなるでしょうが、それによってアゼルバイジャンの経済は発展して行くでしょうが、今日の話は、やはり、そこよりも今日の話題、僕も今朝、アリベイ・チャンネルでもライブをやって、いつも数千人しか見ていないんですけども、ライブでも1万人を超えたんですけどね」

藤「ほう、ほう」

アリベイ「安倍昭恵さんですよ」

藤「ああ、そうかあ」

アリベイ「今日のテーマは、それですよ」

藤「それは、そうですねえ」

アリベイ「安倍元首相、安倍晋三さんの奥さま、安倍昭恵さんが電撃訪問と言ってもいいぐらいですけど、私も朝5時に起きてロシア側のニュースを観てみたら、NHKなんかも出していましたけど、安倍昭恵さんがプーチン大統領と会いましたと。これで、その方は政治家ではないからやるべきじゃないというね、必ず批判して来る方々もいますけども、実際、冒頭で川島さんも触れましたけども、世界をリードするトップのトランプとプーチンと会える人は世界で安倍昭恵さん以外、居ますか」

一同「(笑)」

藤「そうですねえ」

アリベイ「外交官も首相の中に首脳もね」

藤「そうですねえ」

アリベイ「凄い事です。だから現在、日本の自民党政権、立憲民主党も含めてね、僕は原口先生は仲がいいので、あまり批判したくないですが、日本の政治家の中でも、安倍昭恵さんみたいに実際、訪問してプーチン大統領に会える勇気を持っている政治家は他に居ますか。居ないでしょ。安倍昭恵さんは事実上、政治家ではないでしょうけど、実際、何故、その方がそこに行ったのか。旦那さんは残念ながら2022年7月に奈良で、大変なことが起きて亡くなりましたが、安倍晋三さんが首相だった頃に通算27回もプーチン大統領と会っているんですよ。これは凄いですよ。

プーチン大統領も実際、皆さんも見たと思いますが、安倍昭恵さんに対して、安倍さん、安倍晋三元総理大臣が日本とロシアの関係が良くなるように、日本とロシアが平和条約を結ぶように、経済関係が発展するように全力を尽くしたリーダーだということで、評価したんですね。そこで安倍昭恵さんの涙が出ましたけども、それは嬉しい涙だと思うんです、評価されているから。それを一部、日本のメディアがロシアのメディアがへなくそこで、安倍昭恵さんの涙が出ている場面をプロパガンダに使っていると。そうじゃないんですよ。

プーチンさんと安倍昭恵さんが腹を割って話し合っただけで、安倍晋三元総理大臣がプーチン大統領に会った時、いつも昭恵さんも必ず同行していましたからね。だから、昭恵さんもプーチン大統領と何度も何度も会って来ているので、プーチン大統領のことも解っているということで、実際、私達に見えるところで昭恵さんは政治家ではないから、政治行為をしたいということをして貰いたいという発言はしていないですけども、文化交流を続けて貰いたいと。

ロシアは大事な隣国だと。大切な隣国だっていう言葉が使われていますからね、今の石破総理大臣が本当は行って言うべきことを、今の石破総理大臣が凄く仲が悪かった(笑)」

一同「(笑)」

アリベイ「安倍晋三元総理大臣の奥さんが行ったっていうことは、それを考えると、今の日本政権が組んだ話だとは、僕には思えないですけど、それよりも麻生さん側が何か考えて組んだ話じゃないかとも言われているんですが、真実はね、関係者が言わない限り、あくまで我々は仮説を立てられるんですが、これで、これから私は非常に期待をして日露関係が動き出すものではないかと。

少なくともロシア側から見て、日本側からポジティブなシグナルを貰ったという風に解釈されると僕は思います。あとで、僕、笑ったんですけど、日本側で林官房長官が政権としては安倍昭恵さんと話をしていないからコメントする立場に無いと、あと日本国民に対してロシアは危ないから、渡航するのをやめて貰いたいって言うていましたけど(苦笑)」

一同「(笑)」

藤「いかにも外務省だ」

アリベイ「いかにも。だって今の自民党政権、今の石破さん達が安倍元総理の派閥を潰した人達ですからね。あまり良いコメントを期待する方が勿論、おかしいんですけども、でも石破総理大臣が現在の日本の総理大臣がやるべきことを、政治家ではない、でも政治家よりも勇気があって、外交官以上に外交官の能力を持っている姿勢を持っている安倍昭恵さんがやったことは、ロシアから見て非常に喜ばしい事ですし、一つ、後半部分でロシアの農業大国とロシアのことを話しますけども、最後に直近のロシアで一番信用できる世論調査機関、全ロシア世論調査センターというのがあるんですけども、経済産業省とかも多分、そのデータを使っていると思います。

私も北大の修士博士課程の時代に、かなり使ったものですけども、ロシアの敵対国は何処なのか、ロシアの友好国は何処なのか。あくまでもロシア国民感情ですけどね。一般の人達が何を考えているかっていうことですが、ずっとアメリカが1位でしたよ。2019年から2022年のバイデン政権までの調査では、ウクライナ戦争が始まった当初もね。それなのに2025年、直近の世論調査を見ると、アメリカがトップ1位じゃなくてトップ3にも入っていないんですよ。

トップ5位まで、4位、5位までいっちゃったんですね。要はトランプ大統領に変わったあと、ロシアの一般人もいいシグナルを貰っているから、逆にフランス、イギリス、ドイツがおかしくなって、1位はフランスになっているんですね。初めてフランスが1位で、例えば2022年のデータでは、米国は76%、ロシア人の76%が米国は敵だと思っていた訳ですけど、2025年の調査では27%に減っているんですね。

逆に2022年の調査では、フランスは21%しか敵だと思っていなかったのに対して、フランスは敵だと思っている人達が48%まで増えているんですね。だから、このフランスとイギリスとドイツが悪だっていうことを…」

水島「それは1、2、3位ですか」

アリベイ「そう、1位、2、3が変わったんです」

水島「ああ」

アリベイ「長年、アメリカが1位だったんですけど、トランプに変わったあと、トップ3から外れて行ったということですね」

水島「なるほどね」

アリベイ「最後に、この人を紹介して終わりたいんですけども…」

藤「ああ、メルツさんねえ～」

アリベイ「これは、あまり明るい感じじゃなくて、こっちの方が忘れたいんですけど」

水島「(笑)」

アリベイ「あまり笑っている顔じゃなくて、泣いている顔を映したかったですけど」

一同「(笑)」

アリベイ「チャンネル桜の皆さんは優しく、彼の笑っている顔です。こっち側の方がいいか。カラーの方がいいか。あまり出したくないんですけど、この人がウクライナに対して、ゼレンスキー大統領との面談で記者団に対して、ロシアに長距離ミサイルを使っていると許可を出した訳ですね」

水島「うん」

藤「うんうん」

アリベイ「これはラブロフ外相も勿論、回答しましたが、これは、どう見てもドイツは、ちょっとずつウクライナ戦争に関わりつつあると」

水島「うん」

アリベイ「勿論、この戦争はNATOとEUとロシアの代理戦争であることは、皆さん、承知の通りですけども、事実上、ドイツもこの戦争に関わりつつあると。このメルツ首相自身も先人達の第一次世界大戦、第二次世界大戦から何も学んでいないということが、いくら頑張っても歴代強いドイツ人としてヒトラーも攻撃してソ連に勝てなかったことから学んでいないし、フランスのマクロン大統領も、どれだけ頑張ってもナポレオンと比較もしたくない人ですけど、あのナポレオンでさえロシアを潰しに行ったんですけど、結局、負けてしまったということから解っていないんですよ。

ドイツの一番、偉大なリーダーと言うとオットー・フォン・ビスマルク（Otto Christian Archibald Fürst von Bismarck）氏の言葉を最後に言って終わりたいですけど、『ロシア人のものを取らないでくれ。ロシア人は早かれ遅かれ、やって来て自分達のを必ず取り戻しますから怒らせないでくれ』ということを経済主義氏が言っていて、最近、イスタンブールでも大ロシア代表団の会長を務めたウラジーミル・ロスチスラヴォヴィチ・メジンスキー（Vladimir Rostislavovich Medinsky）氏、ロシア人のメジンスキーは凄く立派な方ですけど、頭が良くてね、彼も最近、それを言ったんですけど、ビスマルク氏から学んで下さいと。我々は5年でも10年でも20年でも戦いますが、最終的には自分達のを人にはあげない。ちゃんと取り戻すと言っていましたから、でも、この人達はね、学ばないですよ」

水島「うん」

アリベイ「残念ですけど、第三次世界大戦になるかどうかは今後の課題ですね」

水島「はい」

アリベイ「私からは以上です」

水島「丁度、今、それ言っていましたけど、内部で、ちょっと問題になって、直接、ゼレンスキーと会談した時には、それを供与することはやめたみたいですね」

川島「ああ、そうですか」

水島「それで出来るだけ応援するっていう形の」

藤「ああ、それはタウロス（TAURUS KEPD 350）もやめましたよね」

水島「うん」

藤「出すとは言っていないですよ」

水島「最初、ばあ〜んと言っちゃったんですよ」

藤「うんうん、修正しました」

水島「ゼレンスキーと直接、会った時は、それを言わないで全面的に色々応援するという言葉に替えていて、まあ…」

藤「だってロシアから脅かされましたからね」

アリベイ「そうです、そうです」

水島「これは相当、内部で脅かされたと思いますよ」

藤「すぐそれ、変えましたよね（微笑）」

アリベイ「だって、普通にロシアからすれば宣戦布告ですよ」

藤「ねえ。でも、それで直ぐに腰折れましたからね」

アリベイ「（笑）」

水島「マクロンとかも一時的に言えば、ロシアに戦術核を使わせたかった訳でしょ」

一同「うん」

水島「だから、そういう意味では非常に封建主義的な、あのぐらいでないと戦局が変わらないからというようなことで、メルツは非常に危ない事をやっていますよね。はい。だか

ら圧倒的に勝利する予定だった首相公選の投票も2回やらなきゃいけないんですよね」

藤「戦後、初めて一回目の投票で選ばれなかったんですから」

水島「珍しいですよ」

藤「もう致命的ですよ」

水島「はい。こういうドイツとかね、これも来週、また討論をやと思うんですけども、すみません、宇山さん、お待たせしました」

宇山「はい」

水島「北海道からですけど、お願いします」

宇山「はい。私は今、チャンネル桜北海道のスタジオから繋いで戴いております。今、皆さん、ご案内の通り、北海道は中国人に土地を買いくられる等、侵略工作の脅威の中にある訳ですね。それに対して、我々チャンネル桜北海道が、きちと言論でカウンターをしていかなければならない。防備をしていかなければならないということで、設置運営をされ、水島社長の肝入りで創られたチャンネルですね。本日は、そのチャンネルのスタジオから繋いで戴けることを大変、光栄に思います。

それで一点、ついでになりますますが、私から告知をさせて戴きたいんですね。6月1日15時からチャンネル桜北海道の御主催で講演会を開いて戴きます。DNA遺伝子で読み解く日本人は何処からやって来たのか、アイヌは縄文人の子孫なのかというタイトルですね」

水島「うん」

宇山「会場が札幌市社会福祉総合センターになります」

水島「うん」

宇山「6月1日5時からでございますけれども、皆さん、是非、ご参加戴ければ幸いですでございます」

水島「はい」

宇山「私もアリベイさんが先程、触れておられたように、昭恵夫人のプーチン大統領との面談。これは、今日、入って来たビッグニュースとして最初に取り上げたいと思うんですね。ウクライナ戦争が始まって以降、今迄、ロシア敵視政策をずっと執って来た岸田&石破が、ロシアに対して敵対政策を執って来たが故に、日本はロシアにとっての敵対国になってしまっている」と

水島「うん」

宇山「いざ、この極東有事の時に、私達は中国とロシアの二正面作戦を強いられるという最悪の形になってしまうという状況に追い込まれてしまっておる訳です。しかし、今回の昭恵夫人とプーチン大統領の会談によって、ひょっとすると最後の対談の望みというのがロシアとの間であるのではないかという、一縷の希望が見出せるのではないかなという風に思います。

一つ、この会談をきっかけにして、石破政権が何かロシアに対してアクションを起こすというようなことも、国益の為にあって良いのではないかということは思います」

水島「はい」

宇山「それから先程、大井さんも触れられてましたけども、この中東情勢から、このグローバルサウスの情勢を少し読み解いてみたいと思うんですね。トランプ大統領が先々週、アラブ首長国連邦、UAEとカタール、サウジアラビアの3国を歴訪致しました。トランプ大統領は第一次トランプ政権と同様に第二次政権に於いても、このサウジアラビアを最初の外遊先にしたということは、非常に意義が大きいというように思います。

それから総額2兆ドル、日本円に直すと約300兆円の経済取引を纏めて凱旋をされたということも、大変、大きな取引、ディールではなかったかと思います。今や中東諸国は、

従来型の石油ビジネスから脱却するべく、新しいビジネス・モデルを模索する中、AIとか半導体分野に積極投資をしたいということを考えている訳です。対米投資をしていく。特にUAEの複数の政府系ファンドが積極投資をするという約束をし、アメリカの最先端分野への強い関心を示したということも、特色として挙げられるのではないかと思います。トランプ大統領は独裁者である中東の王族に対し、民主主義や人権について絶対に触れない訳です。それが故に、サウジアラビア等の王族から大歓迎を受けたというのが、今回の中東歴訪だった訳です。それから、やっぱり大事なのが安全保障の分野で、湾岸諸国とアメリカとの間で強固な連携関係が再確認、構築をされていったということが挙げられると思います。

これらの歴訪された3国には、それぞれ米軍基地がある訳です。特にカタールの有名なアル・ウデイド(Al Udeid)基地というのがありますけど、これが中東最大の米軍基地になっている訳ですね」

水島「うん」

宇山「このウデイド空軍基地の整備に、カタールは今後100億ドルを拠出するというようなことを約束した訳です。カタールとかUAEというのは、ペルシャ湾を挟んで北側にイランという強大な国家と対峙をしているという地政学的な特徴がある中で、今後、アメリカの依存度が一層、高くなるのではないかなというように思います。

サウジアラビアも、アメリカとの安全保障協力を強化していくということを言い、そして、1400億ドルを超える米国製の防衛品を調達するというような約束をしている訳です。そして、私が何よりも、今回のトランプ大統領の中東歴訪の中で注目をしたのは、シリアに対する制裁解除をトランプ大統領が宣言したということだろうと思いますね。

リヤドに、このシリアのアフマド・フサイン・アッ＝シャラア(Ahmad Husayn al-Shar)暫定大統領が訪れた訳です。そして会談をトランプ大統領と致しました。この人物は、過激派テロ人物としても知られており、1千万ドルの首の懸賞金が掛かっていたような人物ですけれども、それにも拘らず、この人物と会談をし、制裁を解くという約束をした訳です。シリアはご案内の通り、アサド政権下では親北派勢力の代表格として活動、存在感があった訳ですが、今後は、このようにシリアとも連携をしていくことによって、再び親イランのグループには属させないぞと。

その代わりアラブ陣営、サウジとかトルコ等と協力をさせていこうという思惑が背景の中にあった、これは、私は大きなことだろうと思います。それから何と言っても、このイスラエルとの距離というものが、今回のトランプの中東歴訪の中で、非常によく見えて来たなということは感じる訳ですね。このトランプ政権は、イスラエルとの関係を極めて重要視して来ました。しかし、このイスラエルがイランに対して攻撃をするぞというようなことを、この前の4月7日、ネタニヤフ首相がホワイトハウスを訪米して、トランプ大統領に態々これを言いに行っている訳です。

アメリカがグズグズしているから、俺達は単独でもイランに対する攻撃をするんだと。イランの核武装だけは絶対に認める訳にはいかんのだということで、トランプ大統領の所に直談判に行くと、トランプ大統領がネタニヤフに、ちょっと待てと、まず俺達がディールをするからということで、イランとの核交渉が始まっておるということです。オマーンとローマでスティーブン・チャールズ・ウィトコフ(Steven Charles Witkoff)中東担当特使と、セイイェド・アッバース・アラグチー(Seyed Abbas Araghchi)イラン外相が今も尚、繰り返し協議を継続しているところですけども、いずれにしてもトランプ大統領はネタニヤフ首相の好戦的な姿勢、ガザの侵攻という強硬路線に、もうウンザリしているだろうという様には思います。

このイスラエルを制止してイスラエルとの距離を保つということの上で、今回のトランプ大統領の中東外交というのは、バランスを保つのに役立ったのではないかなというように思います。だからトランプ大統領はネタニヤフ首相の強硬路線に、これ以上、巻き込まれたくないというのが本音としてあるのではないかなと思うんですね」

水島「うん」

宇山「それから、更に面白いのが、この間の動きとしてイエメンの親イラン組織のフーシ派とアメリカが停戦をしたという事があります。そちらに藤和彦さんがいらっしゃいますけれども、何と言っても藤さんは日本で最高のフーシ派の専門家でありますけれども」

藤「そんな…違います（苦笑）」

水島「(笑)」

宇山「このフーシ派と停戦合意をし、しかし、このフーシ派は、イスラエルとの関係は、引き続き交戦状態に持って行くと、攻撃を続行するということをしている訳です」

大井「うん」

宇山「つまり、アメリカやヨーロッパに対する船舶の攻撃をフーシ派は止めますよと約束をしたんだけど、イスラエルの攻撃は続けますよということ、そんな中でもトランプ大統領が合意をしたというのは、私は、ある意味、これはイスラエル切りをやったということが言えると思うんです。ある意味、トランプ大統領の掌返しだろうというように思うんですね。このシリアとの関係正常化については、シャラア暫定大統領とトランプ大統領が会って、シリアの経済制裁を解除するなんという話は、実はイスラエルには事前に全く通知されていなかったんですね。相談すらされていなかった訳です。

イスラエルにとってシリアというのは、極めて重要な地政学的な地域でありますけども、それについてトランプ大統領はネタニヤフに何の相談もなくシャラアと直接、会って話をしたということだろうと思うんですね。イスラエルと距離をとりたいというアメリカの思惑というのが、こういうところからも見てとれると思うんですが、しかし、一方で、アメリカが中東に於いて影響力を行使する為には、やっぱり何だかんだと言ってイスラエルとの連携が欠かせないんだらうと思うんですね。

いくらアラブ諸国と連携を深めていっても、いざ中東有事の時に、彼らがどう転ぶか判らん訳ですよ。そういう意味では、イスラエルとの連携ってというのは、アメリカがトランプ大統領であろうが誰であろうが結局、切ることは絶対に出来ないんだらうというように思います。それから先程触れました、イランとの核交渉というのが結局、上手いかわからないと思うんですよ。この上手いかわなかった時に、また再びイスラエルの存在感というのは必ず強まって来ると思います」

水島「そうですね」

宇山「イスラエルのガザの侵攻が強まっておりますけれどもね、やっぱり、アメリカは、それを、じいっと黙認をしているという状態が続いているじゃありませんか。私は、イスラエルがイランを攻撃するということを、秘かに着々と準備を進めているんだらうと思います。単独攻撃をやめたという訳ではないと思います」

水島「そうですね」

宇山「トランプ大統領が、いかにして、これを制止することが出来るかどうかっていうのが今、中東情勢を考えると重要な課題になっているのではないかと、このように思いますね」

水島「はい。有難うございます。大事な視点を言ってくれましたけど、さっき言った安倍昭恵さんの問題ってというのは、少なくともロシアの最高権力者が会ったということは、日本人と会ったということは、変な言い方だけど安全保障上で、少なくともロシアが今、軍

事的なものとか、そういうので日本に対してやらないっていうことは、はっきりしたと。そして石破とは一緒にやらないと。次の参議院選挙は同時選挙になるかも分からないって言われていますけども、選挙が終わったあとの次の政権の人達とロシアとの日露関係ですね。こういうのをやると、そういう時に安倍昭恵という人物、私も、ちょっとはお会いしたこともありますけど、この人を象徴的にしたというのは、やっぱり、この流れの中でロシアとの日露関係を、もう一回、考える交渉するベースにしなければいけないと。

今、所謂グローバリスト政権ですけど、石破政権では付き合わないということも、はっきりしたと。選挙報道を見て多分、招待をしたのか、或いは巷で言われるように麻生さんがやったとか言われているけども、麻生さん自体は現実には言えば、グローバリストの手先と言うと失礼ですけどね」

一同「(笑)」

水島「そういう人間ですから、ロシアはちゃんと解っていると思います。ただ安倍昭恵という象徴的な人物が社会的な文化的な繋がりから、まずやろうと言ったのは、まず政権交代のあとの問題と、もっと文化的な色んなもので交渉を始めると。少なくとも石破政権とはやらないということ、ある程度、はっきりしたんじゃないかな。意見がある方は是非、面白いアリベイさんから出たんでね」

アリベイ「やらないと言うより、やれないんじゃないですか」

水島「まあ、そうだね、うん。川島さんはどうですか (笑)」

川島「いや、また後半に」

水島「はい。というようなことで…」

藤「中東の関係は一言、いいですか。僕は、かなり違和感があって、ちょっと一言、申し上げたいんですけど」

水島「あっ、あのう、今の、ああ…」

藤「中東とかを含めて」

水島「含めていったね」

藤「はい」

水島「じゃあ、少し時間が無いんですけど、やりましょう。はい」

藤「休憩の後でも勿論、いいですけど」

水島「いや、ちょっと言っちゃってください。せっかく宇山さん、言ってくれたんでね」

藤「はい。正直言って、まだアメリカの中の動きを、まず捉えてからでなきゃいけないと思うんですけど、ウォルツ大統領補佐官って、この間、国連大使に飛ばされましたよね」

水島「うん」

藤「あれ、本当の理由は情報漏洩じゃないんですよ。5月5日のワシントン・ポストが書いていましたけど、彼は一番、イスラエルに与していて、イスラエルの軍事攻撃を応援しろという一番、強硬論者だったんですけど、クビを切られたと」

水島「うん。最近、また、二人、やられましたね」

藤「ええ」

水島「クビになりましたね」

藤「要はNSCも今、大リストラしていますし、それからNSA也大リストラ。あまり、日本で言われていませんけど、トランプ政権で凄いネオコン狩りしている訳ですよ」

水島「うん」

藤「あと、そういう意味で行くと、僕は正直言って宇山さんの説も可能性はあると思うんですけど、相当、やっぱり、この20年間続いてきたネオコン中心を、殆ど、かなり根絶やしにしましたので、多分、イランに対する核攻撃に対して、今、トランプ政権は非常に

クールに見ているんじゃないかなってというのが一点と…」

水島「うん」

藤「それから、あとUSAIDについてのリストラも、あまり言われていないんですけども、これも多分、ご案内の通りウクライナのオレンジ革命とかマイダン革命で全部、USAIDの金でやっていますよね」

水島「そうですね」

藤「ヌーランドが」

水島「ヌーランドがね」

藤「はい」

水島「前国防次官、はい」

藤「だから、そういう意味では合わせてネオコン的、対外、積極的に介入するっていう動きを、スタッフとお金も含めて減らしていますから、多分、私は中東に関しての関与はしない。私は今、アブラハム合意とかって今、最後にイスラエルとサウジと一緒にさせようとしていますけど、私も前から思っているんですけど、アメリカが中東からシュリンクだけする手段ですね」

水島「うん」

藤「こうやって纏めてやったんだから、あとは上手くやってくれと」

水島「うん」

藤「前から申し上げている事ですけど、アメリカが本当にイスラエルに対する軍事供与を本格化したのってニクソン政権からですよ。丁度、その頃、アメリカの原油は一時的に生産が減って、それこそ中東産原油が必要になったので、イスラエルを特使というか、代理人にして中東を守ろうっていうことでやって来たんですけど、今、アメリカ、確か、サウジから日量30万ですから、2000万バレルの重油に対して6%ですけど、これもサウジアラビアの子会社がアメリカにあるから入れているだけであって、中東の石油って一切、要らないんですよ」

大井「うん」

水島「うん」

藤「だから、そういう目で行くと、未だ未だ経済的な下部構造は、もう中東に対する、ある意味では、もう殆ど関与は無くなっているんですけど、まだワシントン政界では、10年ぐらい未だずっと続くと思うんですけど、多分、それが今回、下部構造と、ワシントンって言うか政治の上部構造は、かなり距離が縮まったなあってというのが印象で、それで、これで最後にしますけど、さっきサウジとUAEとカタールの3つの国に訪問して各国から物凄くお金が出るっていう話があったんですけど、おさえておかなきゃいけないのは、産油国は原油収入が財政の殆どを占めていますよね」

水島「うん」

藤「よくIMFなんかが出していますけど、その国の財政が均衡する」

水島「うん」

藤「赤字にならない原油価格っていうのがある訳ですけど、カタールとUAEって50ドル前後ですよ。だから、まだまだ大丈夫」

水島「いっても60ぐらいでしたかね」

藤「まだまだ余裕があって、金が出せると。サウジは普通の財政均衡を考えると100ドル近いんです。例えばネオム。ネオムですとか今、未来型の砂漠都市とか諸々今回のディールを考えたら130ドルは要と思うんですよ」

水島「うん」

藤「そういうことを考えると、しかもカタールとかUAEは、かなり脱石油系化が進んでいますから、やれると思うんですけど、今、私は足元の原油価格が、これから、どんどん下がって行くと思っていますから、サウジが本当に、こんなに3つの国で多分、一番、金を出すって言っていますけど、大丈夫かなってという心配が実はあって、ちょっと、そこは色々と、先程、水島社長が専門家の方からお話を聞いたっていう話で、そういう構想はあるにしても、果たしてトランプさんの今回の外交で、それが本当に根底にあったか」

水島「うん」

藤「私は正直、言って、すれっからしな言い方になりますけど、関税をかけて、世界から投資が来ると、手っ取り早く、例えば数字だけアドバルーンをあげようと思ったら、中東がいいってということで、中東に行って、中東も多分、それに応えて、取り敢えず、アドバルーンを上げただけの話なので、私は正直、言って、今回のトランプさんの中東訪問は、原油の中東依存度が95%の日本からすると、非常に危ういなって、私は見えています」

水島「うん。だから、もう一つ言うとね、それは凄く見方が違うのが出ていて、アメリカは中東から手を引きたいのか。でも実際はミヤシャイマーがいみじくも言っていた『イランは核武装すべきである』あのバランス・オブ・パワー、高名な学者であるミヤシャイマーが言っていた」

藤「ああ、バランス・オブ・パワーから言えば、絶対にそうですね。核武装した方がいいですよ」

水島「うん、だから、そうすると、イスラエルに対するバランスということで考えるとね、こういうことをやった時、トランプが中東から去りたいのか、逆に、積極的に関与して自分達のシェールガスにしろ何にしろ、お互いに石油をロシア、サウジ、イラン、もっと言うと、アメリカも含めて、実は、エネルギーの管理をトータルで狙っているんじゃないかっていう気もしている訳ですよ」

藤「ただ、アメリカの場合は…」

水島「うん」

藤「ロシアとかサウジと違って、もう有象無象の企業が掘っていてカルテルが出来ないので、国が生産管理なんか出来ないの、オペック、プラス、入っているアゼルバイジャンもそうですけど、産油国と全く違う実情なので、アメリカが入って、そのう…」

水島「だから主導しないと余計、駄目、シェールガス以外は今、殆ど大手に吸収されちゃったじゃないですか」

藤「いや、まだまだ残っていますよ」

水島「うん、だから…」

藤「ええ」

水島「そういう意味で言うと、未だ政府主導にしないと、アメリカのそれが潰れちゃうっていうのがあるんじゃないですか」

藤「いや、だから、それはカルテル、独禁法で、それが出来ないので、だから、逆に今、サウジが何をやっているかって言うと、ゲスの勘繰りですけど、とにかく増産して、油化させてシェール企業を潰そうっていう風にやっているぐらいですから、ちょっと、そこは…」

水島「だから、その為に今言ったように、石油も天然ガスも含めて調整しなきゃいけない。昔はOPECっていうことでやったけど、今、そういう意味では中心になるのはロシアとね…」

藤「だから2016年からいったOPECプラスって物凄く上手く機能していますから、そこにアメリカが入り込む余地が全然、無いんですよ。しかも、今、アメリカの議会って

通りませんけど、OPECプラスはカルテルやっているとかって、制裁するべきだっていう法案も出るぐらいですから、ちょっと、そこにアメリカが入ってロシアとサウジでという話の可能性は否定しませんが、どう考えても普通に、私のようにエネルギーをずうっと見ている人間からすると…」

水島「いやいや、普通にね」

藤「うん」

水島「だから、今言った戦略的な流れでね、どっちに向かっているかを言っているんですよ。つまりアメリカは、イスラエルも含めて中東から本当に手を引きたがっているのか、或いはトータルな形でエネルギーを、それこそ、さっきのBRICSじゃないけどトータルな形の、それぞれの国のトランプ流に言えば、それぞれの国が独自の立場で、発展するというのを応援するというね」

藤「ただアメリカの場合は、もうカナダとメキシコがあれば大丈夫な訳ですよ」

水島「ん？」

藤「カナダとメキシコさえあれば大丈夫ですよ。石油は受注できちゃいますよ」

水島「いや、勿論、それは、いや…」

藤「だから、逆に本当に中東のウエイトは、物凄く下がったし、もうシェール革命が起きた2012年ぐらい頃からアメリカで、そういう声が出てますから、そこは確かに戦略っていう意味で形而上的な議論はありますけど、その経済とかエネルギーの流れから考えたら、ちょっと、もう正直言って、アメリカの中東に対する関心度は凄く下がっていると、私は…」

水島「いやいや、もしね、一番、解り易く言うと、石油の値段をあげるのが一番良ければ、戦争が始まりますからね。それはトランプの方針じゃないと私は思っているところがあって、サウジにしろ、何にしろ、イスラエルに、イランの核攻撃をやれば当然、イランは勿論、その時はやられるけども」

藤「だからトランプさんは…」

水島「絶対にトルコもイランもね、サウジアラビアも、みんな、核武装し始めますよ」

藤「だから28日にトランプさんが言っていますけど、先週、イスラエルに対して、もう一度、俺達のディールの邪魔をするなっていう警告を発していますから」

水島「いや、だから、それを認めた上でね、いや、私が言っているのは、そのトランプの戦略的な流れで、今の延長線上で、これまでの延長線で言ったら、全くその通りだと思いますよ」

藤「でも、だからトランプさんの、やっぱり…」

水島「ただ、本当に、それでいいのかなと」

藤「トランプさんの外交とか戦略は、アメリカ党だけで安全を守ればいいという、一国外交主義に、もう、かなり与していますから」

水島「うん、勿論、それは、そうだけれども（失笑）」

藤「うん」

水島「今言ったように、自分達の一国っていうのは、単なる自分達さえ良ければいいっていうように一見、見えますけどね」

藤「でも、だから、それが本当…」

水島「周りが言うことを聞いてくれなければ、関税政策の様にね、駄目だっていうことも解っている戦略性を持ったもので、ただ自分の国さえ良ければいいっていうだけで動いているとは、あまり判断しない方がいいと私は思いますけどね」

藤「でも中東は遠いんですよ」

宇山「ちょっと宜しいですか」

水島「はい、どうぞ」

宇山「発言させて戴いて宜しいでしょうか。今の水島社長の問いですけれども」

水島「うん」

宇山「私は非常に重要な問いだと思います。アメリカが中東から手を引きたがっているのか、それとも今迄通り関わろうとしているのかという問いですけど、私はこう思います。本音として引きたいのは引きたいんですよ、特にトランプ大統領は、こんな、ややこしい中東問題から手を引きたいと。リソースを、そういう所に振り向けたくはないというように思っているはずですが、しかし引きたいけれども引けないという事情があるんだろうと思います。

これはイランが核武装手前という状況の中で、もし、この中東でドンパチが起これば必ずアメリカの政権の責任が問われる訳です。そして、この世界のメディアが騒ぎ出して、トランプ政権は一体、何をやっているんだと。このメディアを牛耳っているのもユダヤ人です。そして、このAPACのようなアメリカ・イスラエル公共問題委員会ですね、強力なロビイスト団体が共和党、民主党を問わず、この政権をコントロールするというような状況が続く中では、やはり、このイスラエルの要望にある一定のレベルで応えていかなきゃならないと。

そうするとイランとも話をしなきゃならないと。イランと話をする為には、サウジアラビアというツールも使わなければならないと。水島社長がおっしゃるようなエネルギー戦略に対して、ある一定の影響力を残していかなければ、イランとの交渉のツールをも失っていくことになっていきますから」

大井「うんうん」

宇山「結局、アメリカはずるずると中東政策に関わらざるを得ないという状況に陥っているんだろうと思います。引きたくても引けないというのが、水島社長に対する私の答です」

水島「なるほどね。もう一つ、ハーバード大学とかそういうもので、反ユダヤ主義とか色んなもので弾圧を加えていますけどね、これも一つの象徴的で政治的な行為で、感情にかられてやっているんじゃないと思うんでね、ということはイスラエルの問題で言うと、今、グローバリスト政権だったイギリスとかドイツのメルツまでイスラエルのあの虐殺行為っていうのかな、ガザのこういった行為を非難し始めているっていうのは、つまり後ろに居るシティとかウォール街、まあユダヤ中心の金融資本とか、こういう人達が何処まで、こうやるかって、今、このまま続けば完全に反ユダヤ。

お前達がホロコーストって言っていたのに、お前達こそホロコーストをやっているじゃないかっていうね、こういう非難が、世界中からそれこそBRICSやグローバルサウスからアラブ世界からも、つまり大義名分でイスラエルの存在まで脅かすことになる。だから、そこのバランスを、やっぱり、宇山さんが今、言ったけど、そういう関わらざるを得ないね、つまりアメリカの社会を形成したのも、国際武器商人やエネルギー・メジャーや金融資本家ですから、これらは、みんな、中心はユダヤの人達ですから、やっぱり、そういうところを無視した上でバランスをとりながら戦って、今、ドルとかそういうものに対しても挑戦していますよ」

大井「う～ん」

水島「だけど何世紀にも渡ってやって来た、ロスチャイルドや色んなものを始めとする世界を支配してきた人達を急に倒したり、いっぺんに消したりすることは出来ない訳ですから、そこのところの部分が現実的な対応を執らざるを得ないというね、当人も、自分がハ

ッキリ殺されそうになったっていうのを知っている訳ですね」

藤「ただ、一方でMAGA主義者って、反ユダヤ主義なんですよ」

水島「うん」

藤「だからトランプ政権が抱えている矛盾が物凄くあるんですよ」

水島「そうですね。それはMAGAっていうのは、ちょっと極端に行く人達も居るしね、ただ、私から見てみると、昨日、トランプが『俺はチキンハート』だってね」

藤「ああ、あのう、タコでしょ」

水島「ああ、タコなんだ…」

藤「Tako Always Chicken is Out ってやつでしょ」

水島「そうそう。つまり何かわあっと強い事を言ったあと、直ぐにビビって引っ込むっていうね。これ、全く違うからね」

藤「うんうん」

水島「あれは本当にねえ…」

藤「ディールですからね」

水島「そう。いや、そういうキャンペーンを、わざとやっているのでしょうけども、その意味で言うと、最初の言葉とか、そういう本音は何処だっているのを見ないと、いつも私はプロレスを見ているような感じがして、面白いんですけどねえ。大体、そうやると、この間、それを言ってね、プーチンを許さないと、あいつは狂っちゃったとかね」

一同「(笑)」

水島「一体、どうしたんだ、プーチンはあ～なんてやると」

藤「あれは額面通りにとっちゃいけないですね」

水島「そうそう、そうそう。そうするとプーチンの方で、また、トルコで直接会談するかいと言って、いやあ、ちょっとメンツを立つじゃないですか、そうすると、でも、また、それがパアになるとかね。こういうことをトランプ、プーチンっていうのはお互いに強かにやっているっていうね」

藤「だってプーチンさんは25年間、ずっとやっていますからねえ」

水島「それはねえ、中々うちの石破君じゃあ、とてもじゃないけど、とんでもないって言うねえ…」

大井「ああ、全然、全然(笑) 国家意識が違う」

藤「だって習近平さんだって12年ぐらいですからねえ」

水島「そうですね(笑)」

大井「はい、国家理性のレベルが違い過ぎて」

水島「ちょっとねえ、でも、本当に、これねえ…」

大井「プーチンさん、理性が高い」

水島「あまり自分の国の悪口を言いたくないけど、本当にそうですもんね。だから、そういう意味で言うと、これから、どうしていくか、ちょっと(失笑) どうしたらいいかって、いつも言っているけど出ないんですけど、後半は少し皆さんの前向きな話を聞いてみたいと思いますけどね」

藤「前向きですか。それは中々難しいですね」

水島「はい。でも、その絶望的な状況を踏まえないと、いいアイデアが出ませんから、しっかり現実を踏まえないと思います。一回、お休みさせて下さい」

大井「はい」

一同「(礼)」

＜後半＞

水島「はい、この番組が何か教養講座になっているんじゃないかっていうね」

一同「(笑)」

水島「そういう話もありますけど、でも今日は、皆さんの色々な意見を聞いて、やっぱり意見の対立も凄く面白いと思いましたね。本当にこれをどう見るかというところで大分、違って来るしね、でも、これは、とても大事な事ですよね。これからの国の在り方とか、世界にとっても、ということですけど、どうですか、これからのことを考える時、あまり人物像で歴史を語るなって言う人も居るけど、私は何とか史観で歴史を語らない方がいいという風に本当に思っているんですよ。

そういう歴史を、よく何年何月にロシア革命が生まれて、これにはツァーリの大変な国民に対する弾圧があったとかというようになって、それは全然、面白くない。でも、その時、レーニンがユダヤのお金を戴いて、それから、こういう風にやってという、その方が本当は面白いですよ。だけど歴史って、そういうところじゃないかというね。

例えば、我々は、よく特攻隊をとり上げるけど、これをアメリカは、覚醒剤を飲ませたとかね。軍国主義で洗脳したとかってね」

大井「うんうん」

水島「私は、これを、ずうっと研究しているしドキュメンタリーをつくっていますけど、ここが一番、中国の人に理解できなかったっていうのは、あの特攻隊が人の為とか自分の命を割と爽やかに出撃して自爆するというね。自爆っていうのは、アラブの場合は、どっちかと言うと、それを、ジハードをやれば天国へ行った時ね」

藤「そうですね」

水島「大変、幸せな目に遭うというね」

藤「うんうん」

水島「こういうことがあるけど、日本の方には無いんですよ。だから、この平家物語とか、ずうっと我々の国の軍事的な、そういう伝説と言うか、まあ、物語を見ている、死というもの、そういう感覚は捉えられていない。だから非常に文化的な、違いというのがあるのと、もう一つはドゥーギンが言っているのかな、ロシアには中世までのツァーリのね、そういう支配があったけれども、近代が無いって、そのまま、ツァーリの世界からロシア革命にそのまま直結しちゃう」

藤「うん」

水島「だからロシアは、ああいう風にアイデンティティを保っているんだと。この感覚が我々の国の、今言った日本の文化の時間を繋げていくっていう、時間の中に自分の命を捧げることは平気で出来るって、今の人達は別ですよ。今の戦後の日本人はもう腰抜けになっちゃっていますから、ただ、そのことを考えた時、やっぱり皆さんに聞きたいのは、イメージとして、トランプはどんな人間か、プーチンはどんな人間か、あまり長くなっちゃうと拙いので、皆さんに印象を聞いてみたいと思うんですね。二人共、変わった人間であることは確かだと思うけど、やっぱり、かなり偉大な、あとから見ると偉大な指導者と言われる可能性も凄くあると思っているんですね。

ただ、違う言い方も沢山あると思うので、こういう解り易いところがあるので、川島さんから、あまり長くならないような形で」

川島「ああ、長くならないようにね」

水島「はい」

川島「分かりました。二人共、大きな歴史の流れの中で出て来た役者だと思って見ています」

水島「なるほど」

川島「お話ししようと思っていたんですが、ハノイで見ていると、今、ハノイは、アメリカと中国の間で股裂きに遭っています。どちらを取るんだって両方から言われて」

水島「うんうん、うんうん」

川島「ハノイとしては両方、取りたいと」

水島「うん」

川島「何の為に取りたいっていったら、自分の利益の為ですね」

水島「うん、ああ」

川島「取りたいと。だけど両方共、それを許してくれないという状況で、それを、どう考えるべきなのかということ、私は一応、顧問をやっているので何か言わなきゃいけない、実は向こうの経営者の息子ですが、次期経営者に教える家庭教師みたいなことをやっているんですが、それでよく言っているんだけど、恐らくニッコロ・マキャヴェッリ（Niccolò Machiavelli）が言っているように、中立というのはあり得ないと」

水島「うん」

川島「そうしたら上手くいかない。そうすると、今の大きな流れを取らなきゃいけないと」

水島「うん」

川島「これはプーチンのあれなんです、プーチンは、この劇の中では脇役です」

水島「うん」

川島「主役は、私が言っているんですが、トランプと習近平が主役です」

水島「うん」

川島「トランプは、習近平、つまり中国を叩きたくてしょうがないんだけど、その為にプーチンというのを仲間に入れた方が叩き易いからやっている訳です。歴史的に見た時にプーチンは、そういう意味では、やっぱりロシアというアメリカや中国に比べれば、弱い国ですよ、今ね。弱い国だし、人口構成なんかもあって、日本よりも人口がちょっと多いくらいじゃないですか」

水島「確か1億5千ぐらいですね」

川島「そうですね。だから、そういう意味では、プーチンとトランプが二人でガチで勝負しているというよりは、トランプの手札の一つとしてプーチンが扱われていると見た方がいいんですね。私は常々言っているんですけど、ベトナムに、この大きな流れというのは、具体的に言えば、中国を怒らせないようにアメリカについていくのがいいやり方だと」

水島「うん」

川島「結局、そこしかないだろうと。そうだけれど、アメリカというのも先程からずうっと出ている議論ですけど、何故、孤立主義に走っているんだって言ったら、やっぱり世界を統治する力が無くなって来た。大親分ではなくなって来たんですね」

水島「そうです」

川島「そういう意味で、私は向こうの若社長に言っているんだけど、これはローマ帝国の崩壊と、かなり似たような現象で、パックス・ブリタニカっていうのは、二度の戦争で急に終わっちゃった訳ですね。あのブリテンの」

水島「そうですね」

川島「今度、ローマも色んなエポック・メイキングなことがあるんですけど、やっぱり、400年ぐらいかけて滅びていくので、アメリカは結構、第三次世界大戦が無かったら、今、似たような現象を起こしているんだろうと」

水島「うん」

川島「それに対してアメリカのトランプが今、一番、恐れているのは自分達に成り代わって、その力を持っているのは中国だと思っているんですね」

水島「うん」

川島「AIの技術を見ても中々油断ならないと。EVなんかを見ても。これを、どうしても潰さなきゃいけないというのが、私はアメリカのトランプだけではない国家意思だと思います。それでトランプは、その中でMAGAなんていう人達も居るけど、そこで乗ってやっている訳ですね。だからトランプとプーチンをどう思うかって言えば、トランプ自身も、そういう大きなアメリカの国家意思の中で出て来た一人の役者だということですね」

水島「うんうん、うん」

川島「かなり力の強い役者ではあるんだけど、恐らくトランプは次はやらないと言っているから、3年後には居なくなる訳ですね」

水島「うん」

川島「そういう意味では、アメリカと中国の争いというのは10年、20年、ひょっとしたら30年くらい続く争いになると思うので、やはり最初に出てきた役者であり、ちょっとピエロ的なところもあるんですけども、中国とアメリカが真のライバルであり、逆に言うとなアメリカというのが残らないと、パックス・チャイナになった時に、アメリカの地位というのは非常に惨めなものだと。全力を尽くして叩き潰さなきゃいけないと」

水島「うん」

川島「その為には、ロシアというものはカードにして残すべきで、ユーラシアの大陸、二つの大国がくっついて、アメリカに向ってくるようなことは防がなきゃいけないと」

水島「うん」

川島「そのことをアメリカの国内に色々と説明するんだけど、アメリカの国内でも、先程から出てくるように、やはり、あんな独裁者はいけないっていう意見もあって、それで、中々意見が纏まらないというのが現状だと思うんですね。だから、ベトナムに言うのは、このことを、よく弁えて、長い間に中国とアメリカの闘いは、中国が意外に早く滅びる可能性があると思っているので、中国に過度に関与するのはいけないと」

水島「うん、うん」

川島「ただ、そんなことを言ってアメリカに近づき過ぎて、中国を怒らせてしまうのは最悪の選択なので、のらりくらりしながら、アメリカの方にくっついているのが得だよということをよくベトナムに言っています」

水島「なるほど」

川島「私はプーチンとトランプについての解釈はそう思っています」

水島「なるほど。陰の主役かも判んないっていうね、なるほど。お二人のあれですけど、いや、実は、これが日本の姿勢を問うことでもあるんでね（苦笑）」

川島「そうです。日本も結構、ベトナムと似ているんですよ」

水島「そういうことですね」

川島「股裂きに遭っていて、だから中国を怒らせるのも良くないんだけど…」

水島「そういうことですね」

川島「やっぱりアメリカにくっついていかざるを得ない状況だと。ただアメリカもローマ

帝国が滅びていくのと、ちょっと似ているので、100%アメリカにくっついて、吉田首相がやった時のようにアメリカにくっついていけばいいんだという態度よりは、少し斜めに見ていないと…」

水島「うっちゃり喰らいますね。(笑)」

川島「そうですね。彼も弱いので、やっぱり、あの時のアメリカと比べると、ずっと弱くなっているので、そういう認識です」

水島「はい。有難うございます。大井さん、いかがですか」

大井「そうですねえ、中国とアメリカの対立っていうので、中国を封じ込めって言っていますけれども、まあ、それは、ちょっと表向きの理由で、私は、トランプもプーチンさんも、中国と全く真逆にある人達だと思う。要するにトランプ、プーチンと真逆なのは何かって言う信仰心です」

水島「ああ、それはあるね」

大井「信仰心です。共産主義っていうのは、はっきりマルクスが宗教はアヘンだと」

水島「うん」

大井「だから要するに習近平の共産主義体制っていうのは、宗教、信仰そのものを全部、踏みこんでいます」

水島「うん」

大井「ですから民族の伝統とか、とにかく共産主義のドクトリンっていうんですか、あれを一番、最高位に置かないと駄目ですよ」

水島「うん」

大井「ということは、キリスト教だろうが仏教だろうが、みんな、抑圧の対象になる。それから民族自決も駄目ですし、ですから基本的に人類の文明、信仰心とか、そこから派生して人権とか民主主義国家というのが出て来て、自由経済というのがある訳なので、法の支配とかね。その体系を守らなきゃいけない、且つ、自国第一主義というのは、皆さんが、さっき、問題をおっしゃっていたように、主権国家であるっていうことで、別に俺だけが良ければいいんだっていう、それとは、また違う話であって、そういう意味でアメリカは、今迄のグローバリスト、自分達が世界の警察官で何でもかんでも入って行って、これが民主主義だ、こうやれと言って革命を起こさせるみたいな、そういう警察官をやめましょうと。グローバリズムはやめましょうと。

その代わり自国第一主義になりました。警察官をやめて、ビジネスマンになりましたと。だからドンパチの戦争で若者が無駄死にするとか無駄な血は流さないけど、経済上の戦争、戦争っていうか色んな交渉はしますと。だから、どっちかが勝ち負けじゃないですけど、一旦、損失をするとか、一旦、儲かるとか、そういう金融的な、どっちかがね、WinWinというのは無いですから、どっちかがバランスをして、こっちが負けたけど、あっちで、ちょっと利益を取り戻すみたいな、こういうのをやる訳ですよ。

ですから基本的にアメリカは世界の警察官、グローバリズムをやめてビジネスマンになりましたと。経済でディールしましょうって、その方が平和でしょっていう、実物主義っていうんですか、ちゃんとご飯を食べて、平和に自分達の信じたいことを信じて、市民社会をやりましょうっていうアメリカの建国の原点に戻るとのことだと思いませんか」

水島「そうですね」

大井「プーチンさんはプーチンさんで、元々ロシアってミール農村共同体ってあるじゃないですか」

水島「うん」

大井「土地に根付いた非常に強い国土愛っていうのがあって、その上に、ロシア正教とか

信仰の力があって、それがロシア文明、美しい文学とかチャイコフスキーの音楽とか、そういうものを創り出したと。だから、そういう自分達の守るべきものがあって、それで、結局、トランプさんとプーチンさんというのは、お互いに主権国家で何を守るべきかという価値観の一致というのはあるんでしょう。中国は全く真逆で、要するに…」

水島「イデオロギーですかね」

大井「イデオロギーで、もう共産主義しか駄目よっていうんです。もう統治の世界に行っちゃっているから、これで何をやったかと言うと、今、経済がボロボロじゃないですか」

水島「うん」

大井「中国を支えて来た不動産投資だとか色んなものが、にっちもさっちも行かなくなっている」と

水島「はい」

大井「しかも中国は21世紀になってBRICSの仲間入りをして、中進国にまでなったというのはWTOに入れたからでしょう」

水島「うん」

大井「みんなが中国を世界の工場にすべき貿易システムをちゃんと提供したから、そこに入って儲けることが出来たと。でも中国は今、これ以上、ミドルインカム、要するに中ぐらい、中進国ぐらいになったけど、ここから先へ行くのは相当、難しいですよ」

水島「そうですね」

大井「無理だと思います。もう経済が内側から崩壊しつつある中で、これ以上の発展は、難しいと思います。それは一部にはAIで凄いものがあるとか、極超音速ミサイルとかが飛んでいますけれども、はっきり言って、ロシアから技術移転して貰ったもので、AIで半導体だっていうのはアメリカから盗んで来たものです。ですから中国が、そう意味で、これから物凄い人口減少と、それから、さっき藤さんが指摘されたデット（debt）ですね。

要するに一带一路の負債の山だとか色んなもので、にっちもさっちもいなくなって崩壊寸前だと思います。だから崩壊する時、勝手に崩壊してくれればいいんですけど（笑）」

藤「（笑）」

大井「巻き込まないでねと。ぼわあ〜っと爆発して…」

藤「巻き込まれるでしょうねえ」

水島「やり兼ねないからね」

大井「やり兼ねない。だから静かに内爆、内爆って言うのかな、要するに、ソ連の経済がにっちもさっちも行かなくなって、内爆してロシアに変わりましたが…」

水島「あれは外に出なかったですからねえ。うん」

大井「だから中国も迷惑かけないで潰れて欲しい、潰れるのは目に見えているんですけども、上手く潰れてねということで、中国封じ込め、包囲網っていうのを今、やっている訳で…」

水島「はい、そうですね」

大井「だから、もう中国は終わっているっていうのは解るんですけど、でも敵視しなきゃいけない理由は、やはりキリスト教の信仰心とか基本的に物凄い信仰の自由っていうのがあって…」

水島「ああ、そうですね」

大井「それをなくしたら、この世界は文明、文化は成り立たないですよ。そこをどうしても守らなきゃいけない。日本人としても我々が中国共産主義に乗っ取られたら神社、仏閣全部、焼け野原になりますよ」

水島「うん」

大井「そのぐらい…」

川島「いいですか、ちょっと一言だけ言わせて下さい」

水島「はい」

川島「いいですか」

水島「はい、どうぞ」

川島「大井さん、ちょっと中国共産党とベトナムの中に、私、居まして」

大井「ええ、ええ」

川島「ベトナムは共産党が政権党ですが、私はベトナム政権の幹部に仲のいい人が居て、彼らは、みんな、共産主義者です。私の周りには、一人も共産主義者は居ません。それからマルクス主義のことについては、私の方がよく知っています」

藤「(笑)」

川島「恐らく水島社長の方が、よく知っています。彼らがやっている行動は、マルクス主義ではありません。実利主義であり、それから中国も全く同じですが…」

大井「うんうん」

川島「共産主義で、あのルールですね。選挙をやらないで自分達が秘密主義でやるというのが、政権を維持する上で便利だから使っているだけです」

大井「うんうん」

川島「中国の方が頭のいい人、これ、ちょっと拙いんだけど、理論が好きな人が多いので共産主義について議論しますが、少なくともベトナム共産党の中で、そのことについての議論はゼロです」

水島「うん」

川島「それからベトナム共産党の中で、路線闘争もゼロです。ベトナム共産党の中でやっているのは、自民党の派閥工作と同じです」

大井「(笑)」

川島「どの利権を、どの派閥が取るかというのをやるので、そういう意味では、日本で、ベトナムとか中国がマルクス、レーニン主義の国であるという見方をするのは凄く浅薄と言ったら悪いんですけど」

大井「うんうん」

川島「間違いです。彼らが宗教を弾圧するのは、それは日本の江戸時代が宗教を弾圧したのと同じです。要するに清朝があって、清朝の中ですね、日本も…」

水島「政治化した」

川島「そうそう、政治化主体の政治であり、それから、それに代わる太平天国みたいなのが出て来たら困るので、そういうのを弾圧するという感じで、宗教は、ベトナムも結構、弾圧しているんですね」

大井「う～ん」

川島「それなりに。それで、それなりに大乘仏教のお寺はあるんですけど、あまり、いい顔はしていないんだけど WinWin でやっているんですけど、基本的に共産主義というのは、私は日本人の方がよく知っていると思っています」

大井「(笑)」

藤「そりゃそうでしょう、当然ですね」

水島「勿論、大井さんが言ったのは多分、一番、本質がね、つまり宗教心の無い人達が、つまり一応、プーチンも…」

川島「ああ、そうです」

水島「トランプも一応、神様、まあ、色んな考えが…」

川島「そうですね、あると思います」

大井「それなりの信仰心がある」

水島「そこのところが無い奴が現実主義でね」

川島「あのう、あい、そうそう、あのう…」

水島「共産主義を利用しながら」

川島「えーとねえ、だから日本は比較的、仏教が根付いたんですけど、実は中国は全然、根付かなくて無くなっちゃったんですね。それで儒教ですよ」

大井「うん」

川島「宗教は儒教で、それからベトナムも儒教です」

藤「そこの話、逸れていませんか」

川島「あ、ごめんなさい、もう、やめます」

一同「(笑)」

藤「プーチンから外れています」

川島「ごめんなさい。分かりました」

大井「はい」

水島「あれは本当にハウツーしかないっていうね」

川島「そうですね」

水島「いかに上手く生きるとかね。いかに儲けるかね」

大井「まあ、そうですね」

川島「そうです、そうです」

水島「そっちの十字を切る方は無いんですね」

川島「それが便利だから共産主義を使っていると」

水島「そういう意味では共産主義は便利ですよ」

川島「便利です」

水島「はい」

大井「まあ、その方が統治は効率的ですからね」

川島「そうそう、そういう話です」

水島「まあ、彼らが」

大井「それは、よく解ります、はい」

水島「はい。有難うございます」

川島「すみませんでした」

大井「いえいえ、とんでもないです」

水島「では藤さん、お願いします」

藤「基本的に世界は今、日本も含めてシニシズムだと思うんですよ」

大井「おお～(笑)」

藤「一番、始めにシニシズムに陥ったのが、ソ連崩壊のロシアです」

水島「うん」

藤「そのあと多分、アメリカになって中国も、さっき、おっしゃったように、もう中国共産党だってマルクス、レーニンだけで、ともかく拝金主義ですよ。豊かになるっていうことだけが共産党の正当性だったので、そういう状況になっていますと」

水島「うん」

藤「その中で、僕はトランプさんとプーチンさんって、ある意味では、非常に共通性があるなって、まあ、今、ふと、思いついたんですけど、彼らが意識しているかどうかは別と

して、所謂、霊媒体質、憑依体質ですね」

水島「霊媒ね、うん」

藤「はい。ですから、あのう…」

水島「神様を体現する、うん」

藤「私はプーチンさんの自伝を読みましたけど、ソ連崩壊の時、確かドイツのドレスデンか何かのKGBの支局長ですよ」

ポリーナ「はい」

藤「90年代、多分、ユダヤの連中に二束三文で財産を売られてしまったという阿鼻叫喚を経験していると」

水島「うん」

藤「トランプさんも本人は元々ビジネスマンだったんですけど、大統領選挙に出てから、何かラストベルトとかMAGAの連中の亡霊が乗りついちゃったと」

水島「うんうん（笑）」

藤「だから、そういう意味では神ですよ」

水島「なるほど」

藤「だから、もっと言っちゃうと…」

水島「でも、本当に神がかっていると思いますよ、うん」

藤「はい。最後、これでやめにしますけど、中国の習近平ってカリスマ性が無いんですよ。中国のシニズム、これから本当に不動産バブル崩壊、金融危機が来ますから、そのあとの、とんでもないシニズムになった時に、それを受け止める様な霊媒体質とか憑依体質の政治家が出て来る可能性があるんじゃないかなあと思いついて、考えておりました。以上です」

水島「うん、その宗教的な問題っていうのと、トランプが本当に九死に一生を得たっていうね、ああいうのを見ると、この間、討論で出たんだけど、やっぱり、そういう経験をした人間は、俺が選ばれているんだという感覚を持ち易い…」

藤「あとMAGA主義者の間でも、MAGAの運動に参加していると宗教的なカタルシスを感じると言う方が多いらしいですよ」

水島「いや、それは確かにあると思うね」

藤「うん。だから、ロシアのことはお二人の方がお詳しいでしょうけど、多分、プーチンさんに対する今、非常に求心力が高まっているのも凄く防衛戦争もあるし、やっぱり90年代の悪夢を繰り返したくない。やっぱり、それを唯一、守ってくれる救世主、クルセーダとしてのプーチンさんと考えると、そういう意味での、所謂、そういう協定主義じゃなくて、もっと原始的、宗教的な、そういうところが…」

水島「うん、ベースに、そういうところがあるかも分かんないっていうね」

藤「元々日本でも政治って政と言いますから、実は宗教と表裏一体ですから、多分、そういう政治の本質が今、両大国で剥き出しになっているのかなって勝手に思いました」

水島「丁度、これは、また、私が言ったことで、まあ、二度ぐらい言っているんですけど、ドストエフスキーのカラマーゾフの兄弟の中の『大審問官』っていうところと言うと、悪魔と再び現れたキリストが…」

藤「ドストエフスキーって、よく、あんな難しい小説を書きますよね（笑）」

水島「でもね、その問題で言うと、このトランプとプーチンは悪魔役の方。つまり、キリストに言うんです。お前は魂の解放とか色々なことを言うけども実際、大衆が求めているのはパンだよと。ちゃんとパンを食わせてくれよということを言っていると。お前、本当は、それを知っているんだろうと」

川島「うん、だから彼らは大審問官な訳ですよ」

水島「そうすよ。私が言いたいのは、そこです。ある種の悪魔ですよ」

藤「だからトランプさんは多分、そこらへんの所を分かっているから…」

水島「つまり、その中で、ちょっと、これ、いいですか」

藤「うん」

水島「ドストエフスキーが大事なことを言っているんだけど、それは、その寂しさ、悲しさが解るか。俺は魂の解放というのを知っているんだ。でも、俺は、まず一般の連中にパンを食わせてやらなきゃいけないんだ。そういう寂しさとか一人でそれをやらなきゃいけない」

大井「うん」

水島「お前は勝手に魂の自由って言っているだけだっていうね。まあ、昔、読んだ本だから内容は少し違うかも知かんないけど。だけど、そういうようなことをプーチンとかね、あれは自覚している。自分が悪魔役をやらなきゃいけない。つまり多くの民を食わせるとかね、それはプーチンもそうだし、恐らくもしかしたらトランプも、さっき藤さんが言った霊媒じゃないけども…」

藤「だから、おかしいなと…」

水島「現実主義者をやるのがね、理想を言わないじゃないですか。彼は人権とか民主主義とか絶対に言わないじゃないででしょう」

藤「別の理想を言っていますよ」

水島「うん」

藤「だって製造業を取り戻すなんて、こんな理想、無いですから」

水島「いやいや、そうだけでも、一種のイデオロギー、今迄の20世紀まで欧米の持ってきたイデオロギー的なものについては言わなくなっているっていうのはね、そのところは今、宗教、宗教心があるところ、というようなことを引き受けている。だから、ちょっと飛び抜けているのはそこで、我々の指導者っていうかトップの人達、石破も含めてクリスチャンって言っているけど、何処がクリスチャンだ、お前はっていうね」

一同「(笑)」

水島「嘘ばっかりつくしね」

一同「(笑)」

水島「嘘をつくし卑怯だし臆病だしね、何も良い事が無い訳ですよ。もうクリスチャンに失礼ですよと私は思っているんだけど。そういう今言った葛藤をちゃんと踏まえているっていうのは、実はプーチンがドストエフスキーとか、ああいうものを、ちゃんと読んでいる。ラブロフもそうですけど、凄い教養人だっていうね。そのことを考えると今、世界を本当に動かしている指導者達が色んなものを持っているっていうことは感じざるを得ないと思うんですけどね。はい、ポリーナさんはどうですか」

ポリーナ「はい。有難うございます。私も普通の一般人から見たら、二人共、愛国者なんですね」

水島「うん、ああ、そうですね」

ポリーナ「だから、本当に自分の国を第一優先で、自分達の国、国益を大優先で考えている二人だと思います。トランプはアメリカ・ファーストとか Make America Health Again、Great Again という風に言っているんですけども、プーチンも同じことで Make Russia Great というのを目指しています。ですから、二人とも、歴史、伝統、宗教を大事にする国造りを目指しているかなという風に思います」

水島「そうですね。はい。アリベイさんはどうですか」

アリベイ「はい。皆さん、後半になりましたけども、前半の部分で、ちょっと意見の争いになって長くなりましたが、私のあとに宇山先生が話したのは大変、申し訳ないですけど、リモートですからね、宇山先生が私のあとで、宇山先生の先に意見を言うのも失礼だなあと、ずっと思っていますけど、大変、申し訳ないです。

実は、私も意見を言いますけど、先程から、ずっと画面を見ていて、宇山先生が、ずっと映っていてチャンネル桜の北海道のスタジオですけど、後ろにずっと北海道の色々な景色が映り変わっていて…」

水島「そうですね」

アリベイ「青池とか色々な所が映っていて面白いなと見ていましたけど」

水島「綺麗でしょ」

アリベイ「私もそうです。とても綺麗です。ごめんなさい、ウポポイとか、宇山先生の講演会の1日には間に合わないんですが、6月3日から10日間、札幌へ出張しますので、またチャンネル桜の皆さんにも、ご挨拶でお伺い出来ればと思います。そして、先程から見ていて、大井さんと藤さんの話が、どうしても、私から見ると暗過ぎてねえ、多分、視聴者の皆さんがもう眠くなったんじゃないかと思っています…」

水島「いやいや、そんなことはないと思いますよ」

アリベイ「現実には、やっぱり暗い話ですから、現実の話をすると、いつも暗くなるんですけども、視聴者の皆さんが、また目覚めるように…」

大井「(笑)」

アリベイ「私は、いい話をしたいです。プーチンとトランプの比較、人格というよりも、ロシアが、いかに農業大国なのかというところでデータを出しながら、まあ、隣に経済産業省の方が居るから反対されるところも出て来ますけども、実は農業に使う肥料の輸出は、ロシアが世界一ですよ。更に小麦、食パンの国は小麦が無いと生きて行けないから餓死してしまいますので、小麦の輸出量も世界一位ですよ。それと同時に世界の輸出全体の24%を今、現在、ロシアが仕切っているんですね」

大井「うん」

アリベイ「2023年もそうだったし2024年もそうです。更に大麦。大麦の生産量で見ると、輸出は1位じゃないですけど、生産量はロシアが1位ですよ。更に言えばヒマワリ油。日本人は何処まで使うか判りませんが、私も日本ではずっと米油を使っているんですけど、日本の米油は高いですけどね。美味しいから使うんですが、アゼルバイジャン人とかロシア人というのは国内でひまわり油を凄く使うんですね。我々は、かなり使います。安くて美味しいですから。それで、その生産量もロシアが世界一なんですよ。

更に言えば世界の精肉ですね、日本語で正しく言うと精肉輸出国ランキングでも第10位に入るぐらい、実はロシアが世界でものを言えるようになりましたし、3月にモスクワから、この番組にリモートで参加した時にも話しましたが、ロシアはポリーナさんの話もありましたが、ロシアに経済制裁して潰そうと、昔のソ連みたいにロシアも経済破綻すれば色々な国が来てロシア国内がメチャクチャになるから…」

ポリーナ「(頷く)」

アリベイ「ウクライナに集中できなくなって、ウクライナ戦争でロシアは負けるというのが多分、ロシアに対する制裁の方の目的で、要は、あくまでも言われていることですけど、実は経済はルーブルだけじゃなくてドル、外貨準備高という言葉を使うんですけど、過去最高の6千504億ドルに達しているんですね。要はルーブルだけじゃなくて、ロシアは外貨準備高でも過去最高を更新しているんですよ。世界でもトップ7位に入るぐらい、お金もキャッシュも外貨も持っている訳ですね。

農業でも基本的には自給自足は世界一と言ってもいいぐらいの国だし、日本とは、かなり離れていますけども、日本は米だけでも自給自足が凄いとされていたものが、今、米も2千円にするか千円にするか訳の判らない議論になっていますが、ロシアは、そこまで強くなってきて、更に直接、日本関連で言いますと、また経済産業省だから何か色々言われるとか指摘がありそうですが、2025年4月だけのデータを見ますと、2025年4月と2024年4月だけを比較してみますと、実は日本がこんなに制裁しているのに、私も会社をやっていて大手企業の口座も持っていますけど、お金を中々振り込めないですよ。

でも何らかの形で日本の政治家の日本の政治圧力、アメリカの政治圧力にも拘らず、日本とロシアの民間人が頑張ってビジネスをやろうとしているんですよ。本当に彼らは頑張っています。その結果として、先月のデータを見ますと、その去年のデータと比較すると、ロシアからの穀物輸入は91倍も増加した訳ですよ。91倍、これはデカイ数字ですよ。更に非鉄金属は266%、LNGエネルギーをアメリカから輸入しよう、ロシアはやめようという話が出ていましたが、実はLNGも22.2%、日本が輸入を増やしているんですよ」

一同「う〜ん」

アリベイ「2024年4月と2025年4月を比較しますと。更に魚介類。日本人は魚介類が好きな民族なので、ロシアの鮭とかサケマスとか蟹が一番、美味しいと言って買っている方々も沢山居ますし、魚介類の輸入でも5.7%増加しているんですね」

水島「うん」

アリベイ「更に、じゃあ、日本からはどうですかという話になりますが、日本からのロシアに輸出は、基本的にロシア人が求めている日本の医療技術とか医療製品は367.8%増加しているんですね。こんな制裁の最中、大量制裁が続けられている中で、日本はね。プラスチックは何と3336%増加しているんですよ。ロシアは日本から買っているんですね。更にゴム、色んな分野で使えるゴム輸出は73%増加している訳ですね。ここで日本人が気にするのは、まあ、これも経済専門用語になるんですけども、ただ日本はロシアとの貿易では輸入輸出を考えると日本の方は貿易赤字ですね。ロシアは貿易黒字です」

藤「そりゃそうですね」

アリベイ「どういうことかと言うと、ロシアからの輸入が多いのに、日本からの輸出は、それに負けている。間に合っていないから貿易赤字で、実は何と266億4千100万円の貿易赤字。ロシアの方は逆に305億3千600万円の黒字ですよ」

藤「そりゃそうでしょうね」

アリベイ「結構、増えているんです。だから、ロシアの経済は元気なんです。さらに言えばLNG、天然ガスの話が出ましたが、残念ながら、皆さんに地図を出せないんですが、今、日本側が、いかに頑張って、先程、大井さんのお話も出しましたが、いかにしてアメリカから買うのかアメリカに利益を持たせるのか、アメリカに払うのかっていう話を日本の政治家がやっていることなので、逆にそれしか出来ないんですけども。

今、アメリカがアラスカからガス田のガス、LNGを引っ張ってこようという話があるんですけども、未だ何も無い訳ですよ。最速でも2031年迄の時間がかかるんですね。それに最低でも6兆円以上のお金がかかるんですよ。アメリカのアラスカから日本まで持って来るとなると、大体7千4百キロですね」

藤「遠いですねえ」

アリベイ「結構、遠いです。その内、しかも1300キロはパイプラインになる訳ですから、えらい金額がかかる。この6兆円というのは単に最初に言われている事だけであっ

て、今、専門家が見ている話で見ると、もう10兆円以上、行くんじゃないかっていう話があるんですよ。時間もかかる。それに比べるとロシアから既に稼働実績もある。まあ、丁度、ポリーナさんの出身地であるペテルブルグからも近いですけど」

ポリーナ「(頷く)」

アリベイ「アークティック、日本語のカタカナの発音が難しいんですけどアークティック・エネルギー2があるんですけど、アラスカから、ちょっと遠いんですけど、大体9千キロ。ただ殆ど出来ているんですよ。もし日本が真面目にやれば2026年に完成するんですね。だから直ぐにでも、その建設費用も3~3.5兆円だけですよ。安価で直ぐにでも日本に引っ張って来られる。引っ張って来られるのに、日本の自民党政権が、敢えて、そこで…」

水島「まあ、ないでしょう」

アリベイ「アメリカが怒るから、ロシアとの協力を拒否して日本人を苦しませて我々企業が…」

藤「ですから、制裁がかかりましたよ」

アリベイ「そうです。そうです。我々頑張っ…」

水島「いや、それは本当にねえ、大変、詳しく教えてくれて、ああ、そうだろうなあと思いましたけどね。全部、ストップさせようとしているでしょ」

アリベイ「そうですね」

水島「更に今、そのお話になると、それも制裁だって言ってやり兼ねないんだよね」

藤「うん」

水島「日本の政府がね」

藤「もうアークティックは制裁がかかりましたよ」

水島「ねえ」

藤「(頷く)」

アリベイ「かかりましたから止めたんですね、拒否して」

水島「だから、そういうことを、日本の政府が繰り返しているんですよ」

アリベイ「だから直ぐにでも日本に引っ張って来て、日本人の国民生活がね、物価も安くなるのに…」

水島「前にね、それは藤さんと話していたことがあって、所謂、樺太っていうかサハリンのね」

藤「ああ、はい」

水島「あの生ガスですか」

藤「はい」

水島「宗谷岬まで40キロしか無いんだから」

藤「日本が一番、近い外国って、実はロシアですよ」

水島「そうなんだ。だから、それをやれば、北海道だと三分の一ぐらいの値段でね」

藤「そうです」

水島「天然ガスを供給すれば北海道の電気代は劇的に安くなって、産業も何も本当に良くなる訳ですよ」

藤「おっしゃる通りです」

水島「だから、やろうと思えばできるのに、まあ、アメリカの妨害でしょうけども」

藤「(頷く)」

水島「ロシアのそういったものをね、今、おっしゃったようなことをやれば、こちらにも大変プラスになるんですね。北海道が発達しないのは、その理由ですよ。北方領土の問題

で、ああだこうだ言う形でね、はっきり言うと、やはりアメリカが邪魔して来たんですよ。ロシアとのね、あのう…」

藤「だから、おっしゃる通りですよ」

水島「だから、これはイデオロギーの問題じゃない訳だから（失笑）」

アリベイ「そうですね」

水島「うん」

アリベイ「やっぱり水島社長が指摘した通り、私は北方領土問題の専門家なので、話すと長いので今日は話さないですが、アメリカが邪魔して来たということは何かと言うと、ジョン・フォスター・ダレス（John Foster Dulles）の恫喝ですね。昔、沖縄が返還される前に、もし日本の当時の政府も、まあ、首相なんかも、未だソ連時代ですけど、日ソ共同声明を出した時に二島返還で平和条約を結ぼうと日本側が考えて決めていたんですよ。だけどダレス国務長官が、もしソ連と二島返還で平和条約を結べば…」

藤「宇山先生の発言の時間が無くなりますよ」

アリベイ「そうです、そうです。はい」

ポリーナ「(笑)」

アリベイ「もし、そうなれば沖縄返還しませんよということになったので、無くなった訳です。だからアメリカが邪魔して来たのはそれです。それ以上は話すと長くなるので、宇山先生、申し訳ないです」

水島「いや、まあ、でもね、この事態はずうっと安倍さんの時だってそうですよ」

アリベイ「うん」

水島「安倍さんの時だってロシアとやろうとした時、やっぱり今言ったような形の…」

藤「だって、外務省が寝転んでましたもん」

水島「うん。駄目だって言うんだよ」

藤「四島返還なんて非現実的な事ばかり言っていて、自分は汗かきたくなかったですからね」

水島「敢えて、せっかく言ってくれたから言うけど、我々がちゃんと四島一括返還でアメリカが支持するって言っていたのが、実現不可能なことを言っておけば（失笑）日本人は、ああ、そうだアメリカは我らの味方だっていうね、結局、ロシアとか繋がりが作れなくなるという、倒壊した一つの流れだからねえ。これからは、もう一つ政権が替わって昭恵さんがねえ、ところで、だから、さっき聞いたでしょう。プーチンについて貴方は、どう言うのかと聞いているんですよ」

アリベイ「私から言わせて貰いますと、プーチンはですね…」

水島「実は、それを聞いているんです」

藤「ねえ」

アリベイ「トランプ大統領よりも、しっかりした外交官で政治家で、何故かと言いますと、トランプ大統領は真面目なビジネスマンで、まあ、大阪の商人みたいにね、大きく言って自分の意見を通そうとするんですが、でも結局、外交官、政治家としてどうかっていう話で言うと、言ったことを、よく撤回、撤退するでしょ。プーチン大統領は言ったことで、撤退したこと、僕は一度も見た事が無いです」

水島「ああ、それはあるねえ。必ずね」

アリベイ「彼は言った事を必ずやり通すんですよ」

藤「そうですね」

アリベイ「成し遂げるから、そういう意味で外交官、大統領としてプーチンは、トランプ大統領よりも、よっぽど立派な外交官、大統領だと思います」

水島「ああ、そうか、外交官とビジネスマンの違いかも知れないね（笑）、コロコロ変わるっていうね。なるほど。宇山さんはどうですか、お話をして下さい」

宇山「はい。トランプ大統領とプーチン大統領を比べた時、どういうことが言えるかというご質問だと思うんですが、先程、ポリーナさんがおっしゃられておられた様に、両者共に愛国者であるという点」

水島「はい、そうですね」

宇山「これは私も、そのように思います」

水島「そうですね」

宇山「やはり、この両者は、かなり性格が違うと思うんですね。この両者をローマ皇帝に例えてみますと、プーチン大統領は初代ローマ皇帝のアウグストゥス（Gaius Julius Caesar Augustus）に近いと思うんですね」

水島「うん、なるほど」

宇山「怜愍で冷厳な計算をするリアリストという、やっぱり私は人物評が思いつきます。一方、トランプ大統領、彼はユリウス、ガイウス・ユリウス・カエサル（Gaius Iulius Caesar）だと思います。熱狂的な改革者。革命者」

水島「うん」

宇山「人々の気持ちを驚掴みにして、その民意ということを背景にして物事を開拓しているという、革命家の素質をもった方だろうと思いますよ」

水島「なるほどねえ」

宇山「更にプーチン大統領は、物事の発想が全て過去に遡って計算し、そして現在の事を考えるという指導者ですよ。それに対してトランプ大統領は未来ありきですよ。未来のところに、まず何か状況を措定して、そこから逆算をして現在、何をしなければならないのかということを考えるんですよ。だから過去から物考える人と、未来から物事を考える人で、私はプーチン大統領とトランプ大統領っていうのは、非常に対極的な性質を持つ方々だと思うんですね。

だからこそ、このウクライナ戦争に於いても、両者の話し合いが中々合わないという部分もあると思うんですね。確かに水島社長がおっしゃるように、今のトランプ大統領が言う『プーチンは気が狂ったんだ』という発言を真に受ける必要は全く無いとは思いますが、しかし、トランプ大統領が考える以上に停戦交渉が難航しているのは、プーチン大統領は、やはりウクライナ戦争がどういう文脈で起こったのか歴史のところから掘り起こしたものをしているのに対して、トランプ大統領は、まず未来に向かって平和なものを構築しようという、取り敢えずは Ceasefire なんだという発想から物事が来ているので、両者の交渉が噛み合わないところだろうと思うんですね」

水島「うん」

宇山「先程、このトランプ大統領の話をさせて戴きましたので、私も一点、トランプ関税のことについて申し上げさせて戴いて宜しいでしょうか」

水島「はい、どうぞ」

宇山「このトランプ関税っていうのは、大井さんや皆さんもおっしゃるように、対中包囲網であると最終的な狙いは、私も、それを同意を致します。ピーター・ナバロさんが言ったように、この対米貿易黒字が中国の富の源泉であり、その富の源泉で彼らは軍備の拡張をしている。だからこそ対米貿易黒字を削減させるっていうことをしなければ、中国の覇権を食い止めることは出来ないというナバロさんの戦略。それはそれでいいんですよ。しかし、実際にその戦略で今、中国を締め上げることが出来るかと言われれば、私は必ずしもそうでない部分も感じる訳です。実際、この5年間、中国の対米貿易依存度はぐう～

んと低下をしておりますし、この第一次トランプ政権の時のように最早、ナバロ戦略が必ずしも当て嵌まらなくなっておりますしね」

水島「うん」

宇山「この関税競争ということでチキンレースをしていけば、私は結局、苦しいのはアメリカの方になって来ると、打撃が大きいのはアメリカの方になって来る。時間が経てば経つほど、不利な状況に追い込まれるという部分が少なからずあるのではないかと思うんです。例えば中国は、レアアースをアメリカに対して禁輸するということを言っている訳です」

水島「うん」

宇山「これに対してトランプ政権は、ウクライナの東部4州をロシアなどと一緒に連携をしてレアアースを獲得する、或いはウクライナ本体の、レアアースを採るんだということを言っていますが、これには採算性に対しての疑問符が付けられている訳ですね。まあ、例えばウクライナにレアアースの工場があったとしても、欧米諸国には、この原材料を加工するという課題に、かなり難しい問題があるということもあろうかと思うんですよ。

こういう中で中国は、関税交渉を自らが有利なように動かしていくという可能性もあると思うんです。即ち今日のテーマとなっておりますBRICSとかグローバルサウス諸国を、中国のブロック経済圏の中にぐうっと引き寄せて、そしてBRICS、グローバル諸国もアメリカと中国との間で天秤にかけて、どっちに付くのが得かという勘定だっと思うんですよ。

例えばベトナムですね。川島先生が先程、ご説明下さった通り、ベトナムは今、結構、苦しいところだと思うんです。一時、アメリカに妥協して中国に対する輸出規制をしますよと言ってみたものの、しかし中国から突き倒されて、いやいや、それも中々というようなことでベトナムは揺れ動いているというような状況ですね。他のアジア諸国がアメリカに妥協するとは限らないと思うんです。そうした中で、この中国がより優位な経済的な状況を築いていく、アドバンテージを築いていくということについて、日本は大いに警戒をしなければならないというところもあろうかと思います。

それから、私は何と言っても、このトランプ関税が理解できないのは、踏み絵を踏ませているというのは解りますよ。それはよく解るんだけど、日本のような同盟国にまで、こういう高関税をかけて来るという無理筋を強いる必要というのが本当にあるんだろうかと。しかも今、日米の間に交渉が行われていますけどね、私は、やっぱり基本的にアメリカは交渉に対して、極めて準備不足な状況っていうのが目立って来ていると思います。そもそも交渉の窓口になっているスコット・ベッセント（Scott K. H. Bessent）さんと、ジェミソン・グリア（Jamieson Greer）通商代表と、自動車関税の責任者であるハワード・ウィリアム・ラトニック（Howard William Lutnick）商務長官の3人の言うことが、それぞれ全然、違う訳ですよ。考え方がバラバラです。

だから、日本が余裕の構えを示して加藤財務大臣が先般、アメリカ国債を売るということも一つの日本の選択肢だなんていう、余裕をこいたような表現までして見せた訳です。やはり、こういう形でトランプ関税というものが、本当に中国を締め上げていく中国包囲網ということで、成功していくのかどうかということの緻密性というものが欠けているのではないかなあという風に思うんですよねえ」

水島「はい。なるほど、この問題はね、今言ったトランプ政権の一つの外交の敵としての中国というのと同時に、もう一つは、今日、出ませんでしたけど、アメリカの経済とか財政が物凄いいじゃないですか。関税をやるっていうのは、単なる対外的な措置じゃなくて自分達の国の財政を改善させるっていうのがあって、もう一つ、これは逆に、大井さん

に聞きたいんだけど…」

大井「はい」

水島「物凄い財政赤字をやるとしたら、超ドル安にしちゃうとかね。ドルが今10%ぐらい安くなっているって言われているんだけども」

大井「う〜ん」

水島「そういう意味で言うと、為替の問題も含めてトランプがやろうとしているのは、私には何か相当、企みがあるっていうか考え過ぎなのかなと思うけど、ドル安っていうのはどうなんですか、その一つの関税、だから、あれも一貫したというよりも、さっき言われた様に何か手段として色んな形でやっているっていう印象が強いんだけども、もう一つはドル安にして財政赤字を劇的に減らしていく。

もっと言うと、さっき言った中東の問題とかイスラエルの問題っていうのは、逆に戦争の起きること、もっと言えば中国が何処まで崩壊するかで、習近平政権がクーデターか何かで倒されたとなった時、じゃあ、中国に対して物凄いアドバンテージとかを持つことが出来るようにやっているのか。結構、浪人中の3年間で相当、考えているっていう感じも、うがち過ぎかも分からないけど、彼らは、そういう風にやって、ドル安をどういう形で巨大な財政赤字を、ですね、国債の問題も、加藤さんが…」

藤「あのう、それについて、ちょっといいですか」

水島「うん」

藤「さっきも言いましたが、貿易収支の赤字が減るとアメリカにお金が入らなくなると、資本収支の黒字が減るのでドルを買わなくなるから、自然にドル安になる訳ですよ」

水島「そうですよ」

藤「だから、今は逆に、特にベッセントさんは為替の話をしなくなりました。極端なドル安になる可能性が出て来ているから」

水島「そうそう。いや、だから…」

藤「だから為替戦略もトランプ政権は、ちょっと後ろに引っ込めていますね」

水島「いや、だから関税ってそういうのが起こるじゃないですか」

藤「だから貿易収支の赤字と資本収支の黒字が一致しますから、貿易収支の赤字が減ったら、その通貨は絶対に安くなりますから」

水島「うん。いや、そういうもののバランスを何処まで考えているのかなというね」

藤「だから、特に台湾ドルが今、物凄く高いでしょ」

水島「うんうん」

藤「やっぱり、その台湾に対して相当、関税かけるってトランプさんが言っているものですから、何かウォール街で、頼清徳総統がプラザ合意みたいなことで合意したんじゃないかというRumorが流れるぐらい台湾ドルが高くて、今、韓国ウォンが、また高くなっている訳ですよ」

水島「うん」

藤「でも、これから円も多分、つられて…」

水島「高くなるでしょ」

藤「上がって来ています。ですから、そういう意味では何もしなくても貿易収支の赤字が減るって行為は、ドル安になります。だから逆にインフレも大変になりますよね」

水島「うん、いや、そうだね。いや、だから、その辺とFRBと彼らがどういう調整をやっていくのか。だから本当に、これねえ、ある方向を持ってやっている事は解るんだけどね。彼がいつも言うようにね、お金の流れが…」

藤「だから製造業も入れて、ウォール街にも金を入れようというのは、両立しないんです

よ」

水島「うん。いや、だからね、折り合いの付け方っていうのはそこだよ」

藤「そう。だから、この30年間は、もう製造業、メインストリームには泣いて貰って、ウォールストリートに金入れるっていう仕組みで、アメリカはそれなりに繁栄して来た訳ですよ」

水島「うん。今迄、レーガン以外はずっとね」

藤「だけど、それによってラストベルトが酷い目に遭ったから、それを30年前に戻そうとしているんですけど、それは無理でしょっていう話ですよ」

大井「ですから30年前に戻すっていうか、全く別のパラダイムシフトが今、起きているというイメージですね」

藤「でも覇権国って、ご案内の通り製造業が駄目で金融大国になって、次の製造大国に、その覇権を譲るっていう話で…」

大井「いや、製造業って言っても今から、あのう…」

水島「昔のあれじゃないね」

大井「さっき申し上げたAI革命の新しい製造業っていうのが、また金融と一体となっていてあるところがありまして、AIファクトリーとかファクトリー・デザインを見ると、金融とか、それから、あと色々なエネルギー政策もパッケージになっていましてね」

水島「うん」

藤「おっしゃる通りです。解ります。凄く解ります」

大井「藤さんのおっしゃる通り、貿易収支、要するに計上収支と資本収支がバランスするから国際収支はバランス・オブ・ペイメントですけれども、さっきから、しつこく言っている中国包囲網っていうのも、やっぱり中国のdirty floatですね。要するに管理為替相場制を彼ら中国側が異様に人民元安に誘導していると。やはり、これを何とか締め付けるっていうことで…」

藤「そうですね」

大井「その周辺の台湾とか韓国とか、我々の日本の通貨も恐らく影響を受けるだろうと。でも、それは多分、一時的なところで、ドルの覇権を取り戻すっていうのがトランプ政権の一つの最終的な目的で…」

水島「うん、最終的なね。はい」

大井「プラス、もっと最終的にはFRBの通貨発行権を、主権国家である自分達の政府の財務省に戻すっていうことが最終目標で…」

水島「でもね、それは、えらい事ですよ」

大井「これは本当に命懸けのことで、そこまで何か全部、パッケージ化して、今、動いているはずですけども、その中でタイミング的には何か色んな所でギクシャクがあるんですけど、恐らく凄く緻密に計算されて彼らは動いているんじゃないかなあと思います」

水島「そうですね。だから、この辺が、さっき言ったようにトランプをどう見るかっていう、トランプとそのバックをね」

大井「トランプさんは、さっきのプロレスじゃないですけど色んな…」

水島「役者として…」

大井「色んな人達が出て来て」

水島「舞台上で大芝居やっていますからねえ」

大井「はい。だから、こいつ空手チョップやったとか足蹴りしたとかって、みんな、わあわあやっているんでしょうけど」

水島「だから後ろでプロデューサーとディレクターが何をやらせているかっていうね」

大井「あとは、ちゃんと国家戦略の人達が居ます」

藤「今、殆どベッセントさんが全て差配していますよね」

水島「う〜ん、なるほどねえ。うん」

藤「彼はヘッジファンドで債券と為替の専門家なんです」

水島「うんうん」

藤「だからトランプさんは取り敢えず彼の言うことを聞いていますけど、何処まで聞くかですね」

水島「う〜ん」

藤「何処かで多分、トランプさんとベッセントさんの思惑が違って来る可能性は出て来ますから、そうなった時っていうのは非常に危ないと思いますよ」

大井「難しいですね。要するに、あの人達は今、色んな主要閣僚にイーロン・マスクが居たりベッセントが居たり、ラトニックは、ちょっとペアですけど（笑）、もう、ボケてますけど、色々な人が…」

藤「ベッセントさんが居るからウォール街も、取り敢えず何となく大丈夫だろうと思っているところがあるので、僕はベッセントさん自身がレイムダック、もしくは政権から去っちゃったら、結構、ヤバいと思いますね」

大井「うん、そうですね」

水島「まあ、そういうことで時間も来たようですから、最後に一言ずつ載いて、纏めにはなりませんけど、載いて終わりたいと思います。今回は宇山さんからお願いします」

宇山「はい。今の関税交渉に関することかもしれませんが、私はこの間、BRICSの中核であるところのインドの動向に注目をしているんですね」

水島「うん」

宇山「トランプ政権の関税措置を巡る国別の交渉で、インドはこれまでアメリカに対して融和姿勢だったんですよ。それが一転、報復関税をアメリカに対して、ちらつかせ始めた訳ですね。インドがアメリカに対して報復関税を課す方針をWTOに通知するというようなことを、つい先般、もうやってみせた訳です。これが、いつ、こういう状況になったかと言うと、中国に対して5月10日から11日にスイスで行った協議がございまして、そこで90日間、相互に大幅に関税を引き下げるという妥協をした訳です。

その妥協の後、インドは態度を急に硬化させたということがございました。一方で、確かにアメリカとインドとの交渉は、しっかりと続いているんですが、もし、このアメリカとインドの交渉が上手く妥結を出来ないということになれば、私は中国が喜ぶだけのことだろうと思うんですよ。インドはパキスタンとの紛争も、先程、何方かが触れておられましたが抱えておるんですが、確かに中国と仲が悪いということはあるんですが、しかし、これを機に、このトランプ関税を機に中国とインドが更に経済連携を深めていくというようなことになれば、日本にとっても脅威になって来る訳です。

従って、私は、このトランプ関税というものが世界にリスクをばら撒いているという点に於いては、とてもではないですが、この関税戦略というのが何か緻密な戦略に基づいて動いていると、それはバックヤードで、先程、藤さんも触れておられましたが、ベッセントさんのような切れ者が色々と差配しているかもしれませんが、これとて、いつトランプ大統領がベッセントさんを切るというようなことになるかも分からない訳ですね。

あくまでもベッセントさんという方は、絶対に自由貿易主義者ですよ。彼が関税をね、こういう戦略をしていい等ということは絶対に思っていないと思いますよ。あのようなジョージ・ソロスの右腕で働いていたような、ウォール街にどっぷりと浸っていたような人物でしょ。

こういう人の意見を何処までトランプ大統領が、いつまで聞き入れるのかということも、やはりリスクとして見極めていかなければならないし、インドの動き方を見ても、私は中々安心が出来ない局面だなというように見ております」

水島「はい。有難うございます。先程、正式にイーロン・マスクが離脱したっていうね。そういうことを言っていましたけど。ではアリベイさん、宜しくお願いします」

アリベイ「最後ですか。皆さま、最後までご覧戴いて有難うございました。様々な分野のプロのパネリストの皆さま方に囲まれて、こういう場で発信出来て良かったと思います。今後、私は日本がロシアと仲良くできる手段が沢山あって、ロシアと仲良くできる、仲良くした方が簡単なのに、敢えて頑張ってロシアと仲悪くしようとしているので、出来れば、皆さん、是非、家に居てYouTubeを観ても何も変わらないから、7月の選挙に行って自分達の期待外れの政治家に票を入れないこと。いやでもいいから、その政治家の反対に居る人、知らなくてもいいから一回、とにかくチャンスを与える、機会を与えることが、僕は大事だと思いますので、とにかく日本は民主国家でしょうから、選挙に行くのは大事です。皆さん、是非7月の選挙に積極的に参加して下さい。以上です」

水島「はい。有難うございます。ではポリーナさん」

ポリーナ「はい。有難うございます。私もずっと、日本の文化、日本の歴史、日露関係の歴史を研究して日本に来ているんですけども、勉強した日本文化と今の日本は本当に同じ国だと思えないぐらいです。本当に申し訳ないですけども、特に電車に乗ると、もう怖いぐらいです。みんな、本当にお互いのことを全く気にしないし、もうiPhoneをいじったりして席を譲らないとか、もうロシア人としては本当にあり得ないことだなという風に思います。

とにかく日本は、やはりアメリカやヨーロッパと仲良くして西洋の国になりたいように見えます。ただ日本は、やはりアジアの国なので西洋諸国と全く同じにはなれないし、で、逆にBRICSの諸国とも価値観を共有出来ていないという、ちょっと中途半端な立場に居るように見えます。

今、トランプ政権ができていますので、日本としては、やっぱり最大のチャンスなのかなと思いますので、やはり日本から今、安倍さんの奥様がロシアに行かれてプーチン大統領と会ったので、それをきっかけとして日露関係の中で何か動けばいいのかなという風に思うんですけども、やはり、それが出来る政治家が本当に居るのかなという風に思います。そこは心配なところですね。

ロシアでは1703年から日本語を勉強できる学校が出来たんですね。これ程、長い歴史を持って、こういう風にメチャクチャになったのは本当にロシア人としては、とても残念なことですし、日本は技術を持って、ロシアは資源大国であって、お互いに協力し合えることも沢山、ありますし、本当に自分達のアイデンティティを見直して、やはり、一步を踏み出して戴きたいなという風に思います」

水島「はい。本当に、その通りだと思うんだけど、我々がいつも言っているのは、戦後の日本人が、本来の日本人の在り方とか、そういうのが占領軍の教育もあったけども、本来の日本人の持っていたものを、どんどん捨てていっているというね。だから価値観も何も戦前まで、もっと言えば江戸の時代までとか明治維新の時代も変わっていたんだけど、ということ自体が無くなって、今、本当に、ただ今だけ、金だけ、自分だけみたいなね、今の欧米の一番、駄目なものを価値観として生きているっていうね、こんな連中とは付き合い切れないっていう感じになるんで、今の話、聞くと、やっぱり自分達を取り戻すって本当に大事だと思いますね。はい、有難うございます。では、藤さん、宜しくお願いします」

藤「はい。よくアメリカの中で貿易秩序をつくらうなんていう話が色々あるんですけど、

これは全くナンセンスな議論で、実はアメリカのGDPより、例えば中国とかEUの方がGDPが大きいですけど、マーケットというか個人消費を考えたら、アメリカの方が大きいですよ」

水島「そうだね」

藤「だから、要は需要と供給ですから、アメリカって、やっぱり、この30年間、ソフトパワーよりも世界から物を買って有効需要をつくったから物凄く求心力があった訳で、それを今、アメリカがやめようとしているんですよ」

水島「うん」

藤「だから貿易収支を出して物を買って、じゃあ、アメリカ人がどうしているかって言うと、ウォール街にお金が入って来て、低金利でカードローンだとか不動産ローンでどんどん世界の需要を生み出して来たので、これをアメリカがやめると言った瞬間に、それに代わる国がない訳ですよ」

水島「うん」

藤「中国だって殆ど輸出攻勢で、エネルギーを買っている所以外は殆ど輸出攻勢をかけていますから」

水島「うん」

藤「EUもドイツも輸出するんだから、そうですね。そんな所がアメリカ抜きで、貿易秩序なんか出来っこない。あと、もう一つ、90年代前半の日米交渉の経験から言えば、貿易赤字国と貿易黒字国が貿易戦争をやったら、絶対に貿易赤字国が強いんですよ。カードがいっぱいあるから」

水島「そりゃそうだよ」

藤「それから、もう一つ、レアアースの問題があるんですが、確か2010年に日本がレアアースを禁輸されましたよね」

水島「うん」

藤「船がぶつかって」

大井「うん」

藤「そのあと何が起きたかと言ったら、どんどんレアアースの中国離れが起きたんですよ」

水島「うん」

藤「実はレアアースって何処にでもあるんですよ」

水島「うん」

藤「ただ労働主力で物凄く、あのう…」

川島「汚いものがいっぱいあるから」

藤「うん。ある意味では、コストも安くて人権無視の国だったら出来るんですけど、中国が出さなかったら、他の国は、どんどんレアアースを開発していますから、多分2010年の日本と同じようなことになりますから、レアアースは全く役に立たないと。だから、そういう意味では、正直言って、米中を考えたら米国が絶対に勝ちます。しかも中国は90年代の日本と同じように不動産バブルが崩壊して、日本も95年の日米交渉の決裂で、超円高になったので、そのあと97年に金融危機が来ましたが、これと同じか、もっと酷いことが起きますから、まずアメリカと中国で中国が勝つってことはあり得ないと」

水島「うん」

藤「それから最後に一つ申し上げておきたいのは、私は一時期、200年単位で日露関係史を勉強したんですけど、後藤新平さんっていう人は結構、日本で有名じゃないですか」

大井「うん」

水島「はい、有名です」

藤「彼は日ロ友好協会の初代会長なんですよ」

水島「ああ、そうなの。ほお～」

大井「へえ～」

藤「彼は英米協調でありながら、ロシア、ソ連とも付き合っていこうっていう方だったので、でも、そういう政治家、まあ、安倍さんもそれを目指してやってこられたと思うんですけど、多分、そういう意味では、やっぱり後藤新平さんを、もう一度、再認識して戴いて、安倍さんのような方は中々出て来ないでしょうけど、そういう政治家が出て来ることを祈りたい。エネルギーから考えたら、ロシアは本当に日本にとってのベスト・パートナーですから」

水島「うん」

藤「本当に、この断絶状態って、本当に馬鹿々々しいし、今、アメリカが多分、上院で、とんでもない法律を作っていて、ロシアから石油と天然ガスを輸入した第三国は…」

水島「制裁するっていうね」

藤「だから500%の制裁をかけますから、さっきアリベイさんがおっしゃっていたロシアから、サハリン2からのLNGを買っていますけど、これも制裁対象になっちゃうので本当に困るっていうことで、私はロシアとの関係を、エネルギーについての自給率が一番低い日本としては、絶対にロシアとは関係を維持して欲しいなあと思います」

水島「本当に食糧とエネルギーはねえ、どんなことがあっても国の存亡ですからね」

藤「はい。以上でございます」

水島「はい、なるほど。有難うございます。大井さん、お願いします」

大井「そうですね。やはりトランプの話ばかりしているけども、本当は日本第一主義」

水島「そうだね」

大井「日本が自立した国として生き残る為には、どうしたらいいか、日本自身が、日本人自身が、どうしたらいいのっていうことを、ちゃんと考えるきっかけで目覚めるといいなと思います。今、社長がおっしゃったように、日本のライフラインですね。食糧、水、エネルギーをどうやって自分達で守っていけるか、正に今、このままトランプ関税でああだこうだと言われて、それこそ日本人は生きていけなくなっちゃうぐらい厳しい状況になる」

水島「うん」

大井「例えば、昔にあった、日本の米に700%関税がどうのこうのとかが、また、あの話が出て来て、アメリカのビーフを買えだとか、大豆を買えだとか、とんでもないことになって、我々には耕作放棄地まであるのに、何故、ちゃんと御先祖さんが残したものを耕して自活できないんだっていう、何か悲しい思いですけども、日本のMAGAですね、MAGAじゃなくて日本第一主義、自国第一主義で、ちゃんと国益を考えて、その上で、ロシアとどういう風に付き合うのか、アメリカをどういう風にやったらいいのか、外交したらいいのか、きちんと最初からやり直さないと駄目だなと思います」

水島「そうですね」

大井「はい」

水島「この小泉農水相がねえ…」

大井「ヤバいですね（苦笑）」

水島「ヤバいですよお。次は総理でやろうというね」

川島「次は小泉総理（苦笑）」

水島「もう、びっくりこきますけどね」

大井「うん」

水島「どれから馬鹿が続くのかっていうね」

藤「(笑)」

一同「(苦笑)」

水島「でも、それで、もう一つは立憲民主党と一緒にやるっていうねえ」

藤「ああ、ああ」

水島「結構、リアリティのある話でね」

藤「年金で繋がりましたからね」

水島「そうですよ。それで小泉でしょう。それから農協と、あれを持っているんだよね。信金じゃなくて…」

大井「ああ、農林中金ですか」

水島「農林中金」

大井「はい。ＪＡとか」

水島「うん。何か１５０兆、アメリカに捧げるっていうね。それで小泉が首相になるっていうことらしいけど」

藤「(失笑)」

水島「もう植民地国家そのもののねえ」

大井「そうですねえ」

藤「笑えねえなあ…」

水島「神輿は軽い方がいいっていうね。あんな軽い奴は居ないからねえ」

藤「笑えねえなあ、農中かあ…(溜息)」

水島「ねえ。実は、皆さん、こういう状態が進もうとして、大井さんの心配っていうかね、本当に…」

大井「心配です」

水島「何か、いきなり凄く嫌な…」

大井「はい」

水島「セコイ話になっちゃっていくっていうね、本当は今、言ったように、もっとちゃんとやらなきゃいけないですよ。というようなことですけど、宇山さん、北海道から、どうも有難うございました」

藤「川島さんが未だ…」

大井「川島さんが」

川島「ああ、いいですよ(苦笑)」

水島「ああ、川島さん今から、川島さん、勿論、どうですか、はい」

川島「じゃあ、一つだけ」

水島「はい」

川島「私は藤さんの意見に結構、賛成しているところがあって」

水島「はい」

川島「中国は結構、おかしいんですよ。それで、今、２０２５年に、この議論をしていますけど、おそらく２０２７年に似たようなことをやると、全く違う議論をしているのかもしれない」

水島「ああ」

藤「いい線ですね」

川島「中国で金融危機が発生して、それと貿易黒字国と貿易赤字国が今、喧嘩している訳

ですよ」

水島「ああ、そうですね」

川島「それはアメリカが勝つという、赤字を持っている奴が変えたくないって言っている奴が勝つと。この辺りが、きっかけになって今、ベトナムも全く同じですけど、大企業とか国営企業とかが借金しまくって色んな事をやっている訳ですね。ゴーストタウンを造るとか」

水島「はい、はい」

川島「それで、そのこのところの会計ってベトナムもそうなんですけど、全然、はっきりしない訳ですよ。日本も大銀行がやったのを当時の大蔵省が隠していたとか、色々あったじゃないですか」

水島「うん」

川島「あの比ではないんですね。自由なマスコミなんてありませんし、だから全部の発表が大本営発表でしか無いので、どのぐらい腐っているか判らないですよ。それで中国でも出て来るけど、下請け企業が払って貰えないとか、ベトナムでもポロポロと出ているんですね」

水島「うん」

川島「だけど、その時に最終的には、中央銀行がお金を貸している訳ですね。だから恒大集団も未だに潰れてないじゃないですか」

水島「まあ、そう言うと、そうですね」

川島「そうです。だから何処から金が出て、みんなを、ちょっと黙らせているんだけど、いつまでそんなことが続くのかと。ベトナムでも思うところがあるんですね」

藤「続かないですよ」

水島「ああ、そう言えばそうですね。潰れて充分いいのにねえ。うん、恒大」

川島「そう。そうすると、これが崩れて、中国で、かなりの危機が発生して云々っていうことになる、今迄のグローバルサウスの盟主になろうとしていたのが、だから、それはアフリカから金を引き上げるとかやっている訳ですよ」

水島「引き剥がしになる訳ですね。はい」

川島「そうです。そうすると盟主が貸し剥がしをやるようなね」

水島「うん、うん」

川島「悪徳金融業者だったら誰もついて来ませんよね（笑）」

藤「だから貸金回収業者って言われたりしていますよね」

川島「そうそう。だから、実はね、カンボジアが今、そうです」

水島「ああ」

川島「カンボジアは、ちょっと前までシアヌークビルを中国の軍港にするんじゃないかということをも日本も凄く気にしていたんですけど、あそこは今、ゴーストタウンですね」

水島「ああ、そうですか。ああ～」

川島「逃げていってるんで…、だから、こういうような状況で、アメリカ VS 中国っていう構図で今見るんですけど、2年ぐらい経つと全く違う回をやらなきゃいけないんじゃないかと（苦笑）」

大井「そうですね」

水島「ああ～なるほどねえ」

川島「そういう風に思っています」

水島「そのぐらい動いているってことです」

川島「はい。だから共産党体制って、先程、言った宗教ではなくて、凄く強い中央政府

と、それから借金をしても返さないで済むっていうね」

水島「(笑)」

川島「借金をさせているのが、国営銀行ですね」

水島「なるほどね」

川島「ベトナムにも国営銀行があって、それが凄く強いんですね。そういうような状況があると思っています。最後に、ちょっと付け加えました」

水島「ああ、いやいや、いや。大変、参考になる話で。それにつけてもということですけど、もう言うのはやめましょう。はい」

一同「(苦笑)」

水島「我々の国も頑張らなきゃいけないっていうことだと思います。今日は、みなさん、有難うございました。宇山さん、有難うございました」

川島「どうも有難うございました」

大井「どうも有難うございました」

一同「(礼)」

***** お わ り *****